

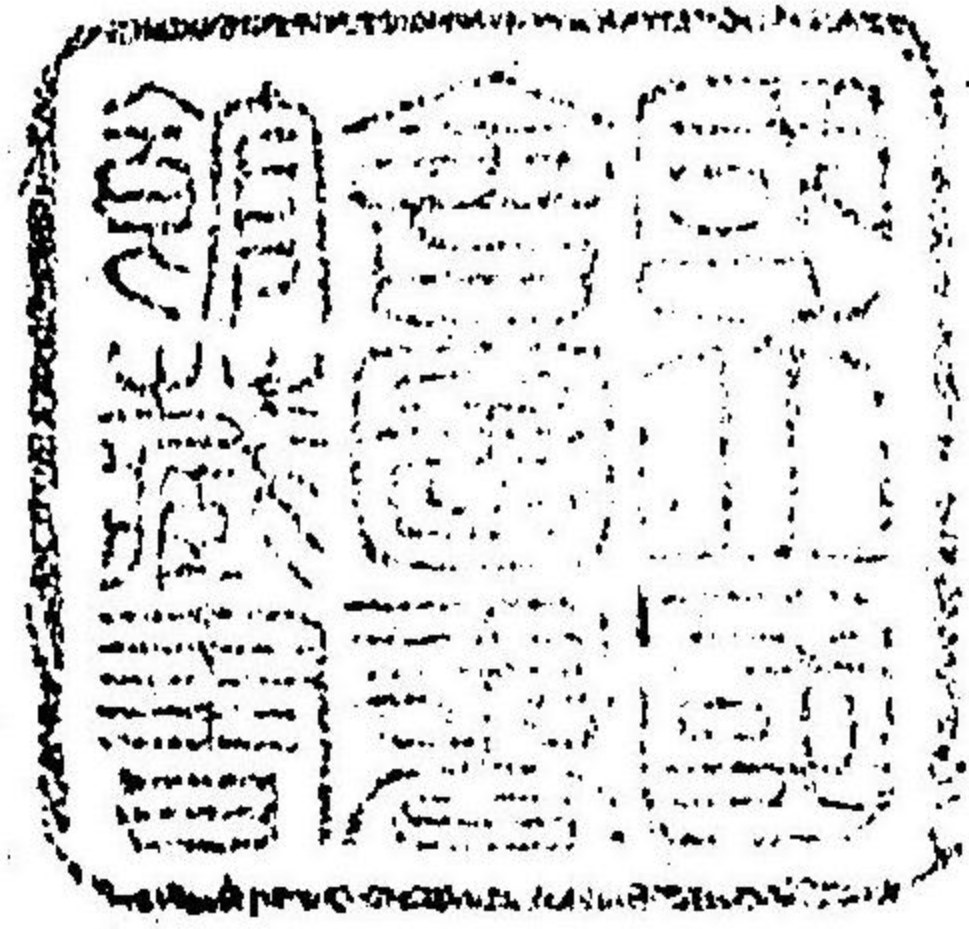
2P-71

石山靖難記

神代洞通編輯

188.7
K.725

188.75
No 725i



221935

緒言

石山の事は世人の喋々する處なり、而して其信長と讞を開くの原因に至ては漠然としてこれを問ふものなく、或は宗徒の強抗事を好むが如く誤想するものなきにもあらざるべし、それ宗主就職の始北國の宗徒鬪梁を極むるや深く証宗主の遺命を奉じこれを誠め給ふ、その信行篤實なる操履に至ては實に蓮宗の遺風を存す豈中年に至て彼の尤めてこれに倣ふに類するの舉動に出で給はんや、蓋し其信長と抗對する實に己むこと能はざるに出るものなり、而してその止むこと能はざるものは、唯これ法門弘化の道をして茅

塞せしむるものあるによれり、宗徒にしてこれを諒せは、深く石山の役の己むこと能はざるに出させられたる原因に於てこれを詳かにし、以てこの舉を非議するものに對して、辨明の勞を執らざるべからず、これ予が今回本編を蒐集するの止むこと能はざる所以なり、唯々倉皇の際これを編輯したるを以其体裁に於て印刷の後自ら尙ほ慊然たらざるものあり然れども事實に至てはその誤らざるを保証す時に明治二十四年五月廿日筆を開明新報社の樓上に閣く

神代 洞通 識

石山法難記目次

○明治二十四年大法主殿の御直諭

○顯如上人畧傳 ○全上人御書通

○大阪古城の圖

叙 論

○石山の建立、大子の懸記に應せ	九 丁
○信長の詭謀、石山の地を請ふ	十四 丁
○宗主の深慮、石山の備を修む	十八 丁
○初度の合戦、信長の肝膽を破る	二十一 丁
○中島の激戦、信長勢敗を取る	二十五 丁
○石山の尾撃、敵軍を困蹙す	二十七 丁

- 信長の遠謀、羽翼を剪る……………三十一丁
- 十艘河の戦、村重智謀を奮ふ……………三十四丁
- 再度の合戦、信長森口に敗る……………三十五丁
- 宗行の憤死、信長石山を攻圍む……………三十八丁
- 石山の秘計、敵軍の銳を折く……………四十二丁
- 城中の困乏、毛利糧食を輸す……………五十丁
- 信長の三子、雜賀の一黨を伐つ……………五十二丁
- 天裁を奉し上人和平を講ず……………五十六丁
- 信徒の過慮再び大阪の守備を修む……………六十六丁
- 佛陀の冥護驚森政伐を免る……………六十六丁

結 論

○附法難錄 (古來眞宗にて榮りし外) (密法難の事を集記す)

去ぬる一月報恩講の砌りに申示せし如く信樂院顯如宗主の三百年の忌もちかつけはことしの春は追遠の法會を豫修せはやと思ひ候抑宗主の御在世は干戈騷擾の折からにして元龜の頃より測らざる法難に遭遇し給ひ宗門の危急は累卵も喩とするに足らず末世相應の要法も今や滅盡せんとするのありさまなりし當時の形勢は彈丸雨注の間に繞に法燈を掲げ給ひ今よりこれを回想すれば人をして肝膽を寒らしむるの外なし此時に於て宗主奮て自から其衝に當り上は佛祖の冥助にまかせ下は門末の丹誠を勵まし嚴護法城の大計を定め給ふ然れども一旦 朝命の降るに際しては速かに聖勅を奉し中宗の基業し給ひし有縁の靈塲を退去するに躊躇し給はず 皇家に忠順なるの素志を全ふし給ひしは世

の普く知どころにして皆其誠忠を欽慕せざるものなしかゝる法運危厄
の間在りても一日も化導を忽にし給はず其遺烈後昆に及び宗門ます
繁昌せしは偏へに宗主の賜にして是しかしなから名聞利養を本と
せず唯後生菩提を事とし給ふに由るへければうたゝ感念の至りに堪へ
ず候静に惟みれば我等まれに稟け難き南浮の人身を受け偶まゝ逢ひ
難き眞宗の妙法に逢ひ宿善の花鮮かに發らけ信心の正因を領解し報土
得生の大益を期する身となられてこそ今たひ宗主追慕の法會を待ちう
けらるゝ本懐とこそ申へけれ夫當流安心の趣は凡夫自力のはからひを
もて往生を願求するにあらずかゝるいたづらものをたすけんとかひ
まします大悲の佛勅に信順し往生の大事を願方に投託し平生業成の安

心に住して佛恩の稱名怠りなく相續ありて世有常道の金言にしたかひ
徳義を養成し愛國の志をつくさるへく候それにつけても去年の十月に
は我至仁なる

天皇陛下は教育を重んじ玉ふの 睿慮より特に 勅語を下し教育
の方針は専ら忠孝節義に示し玉ひ辱く爾臣民と共に眷々
服膺して成其徳を一にせんとを庶幾と曰ひたれば苟も皇國の臣民たる
もの誰か此 聖詔を感戴せざらんや況や眞俗二諦の教義に服事する
我宗門徒たる者にたひてをや進ては國憲を重むし無窮の皇運を扶翼し
奉り退ては倫理を全ふし祖先の遺風を顯彰し各自の本分を盡されて
を信樂院宗主在世勤 玉の尊慮にも相契ふへけれかへすゝも速か

に他方の信心を領得し報謝の稱名を怠らす佛恩師恩相續し畢命を期し
護國扶宗の精神を抽むて猶此度の法會に際しては往時石山法難の時各
自の祖先か肝腦地に塗みれ法城を嚴護せられし遺風を慕たひ報謝の懇
念を勵まし賑々敷參詣これありたく希ふところに候也

明治二十四年三月

顯如宗主の畧傳

本願寺第十一世の御門跡顯如宗主。諱は光佐。第十世証如宗主の嫡
男に。御母は源中納言重親卿の女なり。天文十二年四月十二日大
阪本願寺にて御誕生あり。二十三年八月十二日酉時薨染し給ふ。舊
例青蓮院に於て得度す。然るに証如宗主病急にして京に趣くの邊な
きを以て作法す。宗主病を力め顯如の法名を書して之を授く。証如
宗主三十九歳にして翌日入寂あり因て本願寺の法統を董させらる。
弘治元年正月顯如上人十四歳の御時に。二品親王の宣下を賜ふ。永
祿二年十二月十五日。萬里小路内大臣秀房公を勅使として。上人を
御門跡となし。正僧正に任せられ。又三緒袈裟。及檜扇。爪紅末廣を

賜ふ。四年三月宗祖三百年の忌辰を修む凡そ十晝夜。六年二月宗主紀泉を歴遊し。彌勒寺山の別院を雜賀の森に移す。七年十二月大阪本山の堂舎火あり。八年再興成る。又法會の式を定め。又御堂衆に命じて云く。近來祖門の法制を顧す。宜く先宗主の時の如く祖堂に於て法義を讚嘆すべし。十二年に宗主の次子顯尊(六歳)を脇門跡と爲す。即ち興正寺第四世なり朝廷の優待。眞宗の光榮。此に至て極はまる。元龜元年信長自ら數萬の大軍を率て大阪本願寺を來攻む是より累年戦あり。籠城十一年の長きに及び天正八年三月。遂に正親町天皇の勅裁を以て和睦し兵を息む。四月宗主祖像を奉じて紀州鷲森に遷る。十年六月信長部下の將をして鷲森を襲はしむ。偶々信長

光秀の爲弒せられ幸に免る十七年一月泉州貝塚に遷り。十三年八月祖像を奉じ。攝州天満に移り。是歲堀秀政越前北庄(今の福井)に於て地を施し本山の別院を建つ北地の眞宗再び興復す。十一月大僧正に任ず。十五年十二月傳法符を季子光昭に授く。十七年十二月豊臣秀吉大谷の祖廟舊地及び蠟税の符を賜ふ是に於て堂舎を營み舊觀を復す十九年閏正月豊臣秀吉京師七條坊門堀川の西に寺地十餘萬歩を賜ふ八月土木を創興す。文祿元年十一月祖堂落成す輪奐の美を極む新堂に於て祖忌を修む全二十四日朝暴疾に罹り既にして飯寂す御壽算五十歳治山三十九年。十二月十日を以て七條東河原に關維す。京都所司代前田德善院立以法印。奉行味岡市左衛門。松田藤右衛門葬

事を監護す院家衆一門衆六十餘人。衆僧二千人。彩幘の衆。上下の衆合して五千餘人。官屬若干人。別に女輿四十二乘あり。その時虚空華を雨らし。大さ桃花の如く。葬に會する數萬の道俗。共にこれを見る。謚して信樂院と稱す。宗主在世の間行住座臥暫くも珠數を捨て給はず。病あり侍醫脈を診るの間も佛恩を念じ。稱名絶ゆることなし。その心操殆んど蓮如上人の遺風あり。且勤王の志篤く。獨りその身朝恩に浴するのみならず。延て後昆に及ぶ而して宗主常に先宗主の遺制を重んじ亦屢々郡の中。町の間各々別々に寺内を造立するは。佛法の興隆に似たりと雖も事しげくなりなば。其失あるべし。たゞ世間の名望を先とし。一流の御掟をば。同行あひ互に談合

なくば。かへりて確執のもとひ。我慢の先相たるべき旨を諭示し給ふ又その就職の始め北國の宗徒騷擾し一宗の寺院退轉に及ぶもの多かりしも宗主弘化の謀を設け法流昔年よりも繁昌す故に法敵逼迫の際千辛万艱を凌ぎ給ひ能く強敵を折ぎ宗風を百世に輝かし給ふ。其恩徳の廣大なる深く欽仰すべし。御簾中は細川右京太夫の女。實は内大臣正二位西實隆卿季女なり。教如。顯尊。准如みな其出なり季子准如法統を承く天保十三年三月顯如宗主の二百五十回忌を豫修す。仁孝天皇御香及白銀を影前に備へて昔年勤王の功を追賞し給ふ。今茲明治二十四年三月三百年忌に際し。今上皇帝亦舊例を襲ひ影前に供品を下賜あり實に特旨に出るといふ。

顯如上人御消息

諸國佛法油斷のやうに相聞候。無勿体次第に候。抑一流勸化のれもむきは自力雜行雜修をさしたき。一心に阿彌陀如來をたのみ奉つらん人は。必らず一極樂の往生をとけ候はん事。不可有疑心候。此ありかたさには。行住坐臥に念佛を申され候へく候。則佛恩報謝のつとめになるべく候。あなかしこ

十月七日

顯如花印

門徒中へ

同御書

近日中國警固船被差出候由。就ては當國警固手合之儀。肝要の由被申越尤に候條。急速其心得頼入候此度中國船さしたる働なく。歸國候は。此表一大事。彌必定に候。左候時は當庄之儀可爲同前候。下衆室岩屋に着岸之者。不移時日。令渡海。行末の談合。有之候様。兼て可有其用意候。將亦他國勢と立合。喧嘩口論。亂暴等堅可令停止候。一宗の不覺不可過之候彼是につきて御堂衆差下候間。法義能々可有聽聞候。猶刑部卿法眼可令演說候也穴賢。

六月廿八日

顯如花押

雜賀門徒惣中

今度當在所衆。依無二の覺悟。早々屬本意候事。誠不淺之志。可謂佛然再興。なをく忠節專要。此砌之儀者。萬端聖人へたいし奉り。報謝の思をはけませ。一味同心に申合。國之儀堅固候は。可爲満足候。さればあだなる人間の体。出いきは入をまたざるならひにて。能々被心得候て。いそきて雜行雜修をさしをき。一心に阿彌陀佛をたのみまいらせてのうへには。佛恩報謝のためには。行住坐臥に念佛申され候は。いよく無油斷。法義の嗜肝要候。猶刑部卿法眼可申展候也穴賢々々

二月廿四日

顯如花印

同御書

開山影像守申。去月十日。至紀州下向候間。此以來諸國門徒之輩。遠近によらす。難路をしのぎても。開山聖人御座所へ參詣をいたさるへく事。可爲報謝候。抑當流の他方の安心の趣は。なにのやうもなく。もろくの雜行雜善をなげすて。一心一向に阿彌陀如來をたのみまいらせて。ふたころなく信したてまつれば。必々極樂に往生すへき事。不可有疑候。此上には佛恩報盡のため念佛申され候へし。相構てく法義無油斷可嗜事肝要にて候。猶刑部卿法眼少進法橋可申候也。穴賢く

五月二十四日

顯如御判

坊主衆中へ
門徒衆中へ

大阪退去以來。一日も安堵なく漂ひ申所。各馳走。身命を抛れ候事難忘悦入候。殊更其津を出てより。天氣よく海路閑に。其夜に吹井浦に着候。偏に開山の御乗船ゆへ風波の難なく尤も難有候。夫に付ても他力の本願頼母敷候。急て信心決定して。弘誓の船にて生死の海を渡り。西方淨土へ往生を遂候はんする事肝要に候。彌々油断なく法義をたしなまれ可申候。穴賢く

十月廿四日

顯如御判

石山靖難記

筑前 神代洞 通著

叙論

君臣私欲を逞ふし。名教壊破し政權分裂して。統一する所なく。海内鼎沸し。乱麻の状拾するに由な死が如死もの。足利氏の季世應仁已後を甚しとす。應仁の乱は山名宗全。細川勝元互に權を争ひ。各々島山。斯波の嗣子を黨援し。東西に相持し。京都に戰ふこと十有一年の長死に及ぶ。この間公卿の邸宅。佛神の殿堂。悉く灰燼に罹り。鞠して荒野となる。その壞亂の極。前後實に未だ曾て有らざるの慘狀なり。應仁而して具宗中興の明師第八代蓮如宗主の出世し給ひし亦實にこの時にあり。文明九年九月の寶章に。夫當時世上の跡たゞく。いつのころにか落居すべととも。おぼへはんべらざるの風情なり。しかるぬいだ諸國往來の通路にいたるまでも。たやすかりざる時分なれば。佛法世

應仁の亂

蓮如上人の出世

眞宗衰

中祖法門復興

山徒大谷の殿堂を破却す

法につけても千萬迷惑のありふしなり。これによりて靈佛靈社參詣の諸人もなしと慨歎し給ひしも。當時の状況を叙述したまひたるものなり。これより先元文明五年山名細川の二氏各病死して兩軍との統帥を失ひしも餘衆なほ散せ漸く十月に至りて乱始めて平ぐ。而して蓮宗主の宗門興隆の偉業は。この鼎沸乱麻の際に成るもの亦一大理由なかるべかりき。それ全宗主の世に出る。一流法門の微々たる緒がに一綫絶へざる縷の如く。世間亦佛教に眞宗あるを知りき(遺徳記にそのころ一流の義しかじかとする人おほからざるあいた。他門他かたしとある)こゝに志學の年に及び慨然として宗門興隆の志あり。爾來炎涼時を分たせ。學窓の中にありて聖教の秘蘊を探り給ひ。文安元年三十歳の頃に及びて法化漸く盛んにして宛る旭日の天に中せんとするの勢あり。全四年始めて東北游化の途に上り給ひ。その繁榮殆んど宗祖大師東化の昔に超駕す。飯沼の後々花園天皇寂信淺かりき。日蓮門を賜ふ(聖代老の手つ)寂山の僧徒これを嫉み寛正六年大谷の殿堂を破却す(委く後)これ實に宗祖大師北越遷謫已後の外難なりとす。而してその後屢々外寇の爲めに困厄され給ひし

王室式

實如宗主即位

も少も屈し給ひき。只一意専心に布教し。其處世の要を教ゆるに至ては専ら地頭領主を疎畧にすべかりき。年貢所當をつぶさにすべし。王法を以て本とすべしといへる數項の教誨は當時壞破せるの民心を統攬して大に頹風を既倒の中に挽回し。併せて宗門興隆の偉業を奏し。其後嗣に至りては實に皇室に對しこの教誨を實行し給へり。後土御門天皇の明應九年九月廿八日を以て崩御し給ふや。御用脚なく四十餘日御遺骸を黒戸の御所に置死奉りて殯歛すること能はせ。全十一月十一日泉涌寺に御葬送の時は内裏北の壞墻の築地の間より御車を出し奉つると(皇年代)斯る景況なるを以て後柏原天皇踐祚し給ひしも二十餘年。大禮を周備すること能はせ。永正十七年に至る。この時實宗主即位料壹萬兩を調進し給ふ。天皇深く實宗主の功を感じ給ひて藤原行成筆する處の二十六歌仙の集を賜ひ且累世准門跡たるを勅許し給ふ。(通鑑提要)この時足利氏の威令衰へて諸侯に及ばせ。君臣の弑虐相繼ぎて國史にその跡を絶たせ世間誰か亦王室の式微を嘆じて志を致すものあらんや。而して實宗主身緇門にありてこの美譽あり。實に勤王の事緒田豐臣に先

証如宗
主即位
料の不
足を補
ふ

本願寺
三世の
勤王

二品親
王宣下

老るものといふべし。天文五年第十一代証如宗主周防の大内義隆を勸めて後奈良天皇即位の資を獻せしめて自かりその不足を補ひ。永祿六年第十一代証如宗主に及びて亦毛利元就をして後正親町天皇の即位の料を進獻して大禮をして完結せしめ給ひたるは實に教門の歴史に一大光彩を發生せしむるのみならずその勤王の厚死三世一轍に出づるもの。これ眞宗偉大の勢力を常時の世界に占有したるの一大理由たりとせんばあらず。

証如上人天文二十三年を以て入寂ありその在世朝廷褒賞に及びせ。故に入寂の翌年弘治二年正月後奈良天皇の顯如上人に二品親王の宣下あり其勅書ハ「極官之事。爲二品親王被執申候間則宣下候。珍重思給。一宗之光美。數代之佳模。勿論候。猶從門跡可有眞達候也正月廿七日御諱本願寺僧正御房」とあり別に青蓮院尊眞の副書と女房の奉書あり而して顯如上人の周旋に由て毛利元就をして即位料を獻せしめ且その不足を充備し給ひしことは源忠彥の著はす處の野史に出づと予未だ本文を檢せざれども通鑑提要によれば永祿二年十一月毛利元就の獻資によりて來春即位の日時及び上卿侍從を擬定せ

られ。元就を大膳大夫に任じ。陸奥守を兼ねしめ且つ菊桐の章を賜ふとあり案ざるに全年十二月十五日萬里小路前内大臣秀房を勅使として顯如上人を御門跡となし正僧正に進み又三緒の袈裟。及び楡扇。爪紅の末廣を賜ひ。又証如上人に權僧正を追贈せられ殊に坊官下間頼良。全賴資を法橋に叙し。賴總を法眼に叙するものは即位の日時擬定の後にあり且つ一時にこの榮錫あると毛利氏の叙任と殆んど同時にあるものは蓋し即位の識に與かるべしなり尙後日の考証を俟つ

永祿元龜の頃に至りては亂益々甚く。武人到る處に割據し。強は弱を併せ。小は大に兼ねられ。宛も春秋戰國の觀に似たり。この時一方に屹然として威譽を振ひしものは美濃の織田信長。甲斐の武田信玄。駿河の今川義元。相模の北條氏政。越後の上杉謙信。越前の朝倉義景。中國の毛利元就等なり。或は君父を弑して篡立せるものあり。されども已に割據の時代たり。豈に政刑の權を操りてこれを懲罰するものありんや。理非の曲直は干戈に訴へて勝敗を決するの外亦審理すべ死の處なし。石山外寇の如死。信長大坂

本願寺
信長の
請を容
れざる
の理由
あり
第一

第二

本願寺の土地を奪ひてこれを城かんとせしむ。宗主のこれに應じ給はざりしを以て信長
兵力を以て我に加へ。これを滅絶せしめんとせり。當時蓮宗主遺化の澤深く民心に入り。
殊に顯宗主の行化に風靡せしを以て。全國の門業力を御侮に盡せしかば。信長の勇
武を以てするも遂に志を得ること能はざ。天正八年三月勅裁を以て講和せり。而し
予が信長の本願寺を滅絶するにありと斷言する所以は。要するに左の二條の理由に出る
ものなり。第一は信長永祿元年を以て京都四條坊門に南蠻寺を建。二人のイルマンに切支
丹の弘化を許せしかば到る處に傳教師を派遣し。而してその尤もこれを拒絶せしは眞宗
の信徒にして。京都。大坂。堺。近江。越前の諸國にありて。屢々彼れと論議して屈服せし
め。或は信徒中にこれを殺害したるものあるに至れり。故に両イルマンは屢々信長へ説
言して吾宗を滅絶せしめんと欲せり。(香川正矩の)第二は日蓮宗京都妙覺寺日乘信長に破宗
の企を勵めしめしによる。(これより先き三十八年前証宗主の時天文元年日蓮宗徒近江)日乘は信長に親
信せられ其傍にありて事を用ふ。故にその言聞かれざるはなし。足利義昭の信長と隙あり

圓如尊
師坊舎
建立を
禁す

顯宗主
遺制を
奉す

るや。蘇州毛利三家より三人の使者を遣はし。備後安國寺惠珠長老を副として上京せし
め。その平和を謀る。主として秀吉日乘に就てこれを説し。且つ日乘に托して信長を規
諫せしめ。遂に義昭をして竊かに毛利氏に因うしめたるを以てこれを見るときはその破
宗の説信長に容れられたるや疑ふべかりき。顯宗主夙にこれを探知し給ひしを以て深く
慮る處ありその請を斷然として拒絶せしめ給ひたるを知るべし。初め偏増院圓如尊師
(九代顯宗主の子、証宗主の)寺を作るの亂階たることを監みて制を立て、宗徒の坊舎を建つ
ることを禁む。然るに實宗主滅を唱へ。証宗主の世に及びてこの制を破り。各寺内を設
けて徒衆を囂集するものあり。これ確執論論の基なればとて重ねて法制を設く。顯宗主
に至りてはこの遺制を擧て下問戸頼に懇諭ありしを哲顯屢々親聽せしことを反故裏書に記
せり。(全書は永祿十一年)全宗主夙に意を如此事に用ゐ給ふ。何んぞ好んで信長と隙を開け
て法流を壅塞するの舉ありんや。況んや蓮宗主の大坂建立の寶章にいさゝかむ世間の人
なんども偏執の族もありむつかし死題目なんども出来ありんと死は速にこの在所に於て

石山籠城の止むを能はざる所以

信長隠險手段

石山の役偉大の勢力を示す

信長を評す

石山の役信徒を振作す

石山の形勢

執心のこゝろを止て退出すべしとあるの遺誠あるに於てをやこれ石山籠城の止むこと能はざるに出でたるものなるを知るべし。それ信長は一世の梟雄にして詐謀に長じ。其勇美濃の齋藤龍興を亡し。伊勢北畠具教を滅する陽りて姻親を結び。遂にその國を吞併す又足利義昭を翼戴して四方を征伐し。其志を得るに及びては之を放つものは。只一時義昭に結託して雄圖を開拓するに過ぎ其陰險の手段實に恐るべし。而して石山の役は顯宗主の遺烈門末の功績によるものなりと雖も。抑々亦その淵源を蓮宗主及び實証二宗主の能く遺緒を繼ぐに發し。徳澤上下に浹洽するの所以によりんばありざるなり。或は石山の事世にこれを評じて日本佛教の歴史に汚點を注ぐものなりとするものあれども眞宗が將來偉大の勢力を社會に占有せしものは實にこの役已後にありとす豊臣秀吉。徳川家康二公はその偉大の勢力容易に挫折すべかりざるを知りこれを好遇して大に外護に力を盡くし信長の威力を以て之を滅せんとせしとは全たく反對なり。甲斐信玄曾て信長の本願寺征伐を評じて云く信長古今の名將たりと雖も本願寺を敵にせらるゝこと甚はだ

無分別なりと蓋し本願寺は信徒全國に滋蔓せるを以て到る威恐を買ひ不平の徒起り偶々彼を討せれば此に起り終にその志を得ること能はざりし所以なり後の宗教を遇するもの深く織田氏の事に鑑みざるべかりざるなり嗚呼石山の役は内眠れるの信徒を起して均く法の爲めに盡すの氣概を振作せしめ外に向ては眞宗教徒の信仰上に於ける團結の鞏固を示したるものと云ひつべし今此編を讀むもの古今の間を俯仰せば百感湧起して慨歎に堪へざるものありん吾人復た言ふに忍びざるなり

石山の建立、太子の懸記に應ず

大坂は攝津東生郡生玉の庄にあり。元一邑の名なるも民屋繁榮するを以て二府の總名となる。石山の地は實に今の大坂城の所在の地なり。遠く西國の咽喉を扼し。群峯右に繞り。平野東に連り。淀川北に貫穿し海灣迂廻し。百貨津頭に輻濳し。繁榮比なく。實に海陸の要地を占め居れり。然るに眞宗中興の明師蓮如上人八十二歳の時明應五年九月

蓮如上
人建立
の事縁

上宮太
子の懸
記に應

土中
瓦あり

文永二
年見阿
瓦を堀

この地に一字を御建立あり。その起原は一日境の御坊より四天王寺へ御参詣あり玉造の方を徘徊し給ふに。優美なる一人の天童忽然として上人の前に現し。告て云く。我貴僧の到るを待つこと久し。此地教法有縁の處なり。宜く一字を創めて衆生を救済すべし我は上宮太子の使なりと言ひ畢て見へぞ。(信長記)是に於て上人奇異の想に堪へ老太子の本願縁起の文を披閱し給ふに云く吾滅後。比丘教法を弘興し。有情を救済せん。これ我後身なりと。又云く玉造の岸上に二萬枚の瓦を藏匿す。修造の時これを用んのみとあり是に於てこの地に過去の芳契あることを知り給ひ。土功に着手し給ふ。此時眞言宗法安寺(法安寺と云ひ弘法大師の開基あり)の僧明日は大悪日なれば寺塔造立には然るべかりと云ひしを森祐光寺の僧(祐光寺の僧正聖房といへる人)竊に上人に啓せしければ上人の云く。如來の法中に吉日良辰を撰ぶことなしと涅槃經に説く置死給ひたれば。佛説に虚妄あるべかりを明日早々着手すべし。この後法安寺繁昌あるか。此寺場退轉あるか思ひ合ひすべしと語り給ひしに天文二年第十世証如上人の時に及び日蓮宗より屢々本願寺を攻めしむ敗る

こと能はせ木澤左京亮長政の仲裁を以て和を講じて退く。而して法安寺へ種々の難題ありしが本願寺の好意に頼て無事なることを得たり然れども永祿七年の火災に燒盡しぬこれは後の事なり。然るに多くの信徒は招かざるに來りて築造の事を助けけるが土中を平らるに及びて多くの瓦を掘出しぬ。その數今度結構の新堂を葺くに恰當せしとこれ道般の工事は全く本願縁起の懸記に應じ給ひたるものにて眞宗の繁榮は佛意に出づるものなるを知るべし又この地初め水に乏しかりしがこれも上人の指示に任せて地を穿ちしに清冷なる泉地中より湧出でたり今の大坂城中に蓮如井と稱するものありといふ實に不思議なる事ともなり然るにこの瓦に就て尤も奇異なる事ありけりそは明應五年より二百八年前即ち龜山天皇の御代文永二年(見眞大師入滅の後四年あり)に見阿といへる法師生禪宗を立て多くの人を集めて説法なせしが聖徳太子天王寺修理の料に玉造の岸に瓦を埋め置死給ひしこと縁起に記しあるを以てこの法師堀出して寺家を修理すべし料に申請けしに評定の上宣言を蒙るこの時天王寺にては我寺衰へ修造の力なかりと此の瓦を用ゆべしとあり

大坂御
堂落成
天文元
年の外

當時佛法繁昌すこれを掘りんこと然るべかりと訴へしに若時至りては彼瓦顯れまじ
只太子の冥慮に任すべしとの事により全年六月の頃この法師數百人の人夫を率ゐて玉造
の岸に幔幕を引廻はし燒香散華して掘鑿しむるに十日間を經るも徒勞に屬して更に見へ
せこれ全く太子の冥慮を憚りせ擅に自の所用にせんと欲心より致す所なるを以て其
効なかりしなりんこの法師八月晦日自ら剃刀を以て喉を指して死すこの事五代帝王物語
詳傳類從に見ゆ又柱木は和州吉野山より誰れ切出すとなく多く運搬寄附したりといふ(これ
三十七) 事は當時珍しからぬ事にて今の信徒が動もすればその本山の爲め些少の金錢勞働を爲して人に誇示せんとするが如き
にあらす彼の徳川中世の大御新井白蟻はその著書聖學自在中に於て本願寺阿彌陀堂建築の時瓦を攝津の池田より焼出
したるに瓦出來次第これを門外に出し置けはこれを頼む人もなく頼まれたるものもなければ其瓦自然船場まで運
送し船場より大阪に運送し何時となく京都に著す人々斯程まで歸依渴望すること他に比すへきものありや實に三代の
民の敬に化し君主を尊敬し親め斯くて翌年新堂落成せるを以て蓮如上人自ら其退隱所に擬し
給ひ八年二月迄御住居あり其後二十三年を經て天文元年八月廿四日証如上人の時に及び
江州の六角定頼日蓮宗徒と山科本願寺を攻め殿宇を焚毀せしを以て祖像を奉して大坂石
山本願寺に移住す。二年四月細川澄元日蓮宗徒と天王寺に屯し。數月これを攻るも勝つ

裏書
の

こと能はず。遂に和議を結ひて退く顯誓反故裏書に「然處先年日蓮黨其外諸武士をか
たりひ。數月せめ奉りしかども其煩なく。彌御繁昌恢弘先言猶以信敬し奉る所なり」
と又云く當住上人(顯如宗主を指す)の御内証ありかにましますしに大坂靈寺にを
いてはその煩ひなし(この記述に云へる如く永徳十一年に成れるものにて三年の後信長の難起る)これ不思議なりいかなる約束のあり
けるにやと蓮如上人の御筆のあといよく貴み奉るものなり上宮太子の未來記。信証
院法印以後までも御心をのこされし慈愍なり。特更前住上人(証如宗主)にも數度の横難
をのかれおはしませし。佛法再興の靈場となし給ふる。定て往昔の芳緣。太子の監察猶以
敬依渴仰はかりなだむのをや。蓮如上人も都鄙數個所御造寺おはしといへども。自ら建
立の所は南北に吉崎大坂兩所なりと尊言なりたどる。是れなり。これより後天正八年迄
四十九年間石山を以て一宗傳化の根本道場とし給ふ斯の如死由緒ある石山本願寺の地を
請ひ其實これを滅却せんとするに至りては石山の役實に止むを得ざるに起りたるものな
りるを知るべし

四十九
年石山
本願寺
となる

●信長の詭謀石山の地を請ふ

足利氏の季世紀綱掃はせ。兄弟相屠戮す。君臣相弑虐す。阿波公方足利義植の子義隆三好日向守長縁全下野守政康。松永彈正久秀を延て謀主とし。將軍義輝の位を奪ひ征夷の職に就かんと欲するの志あり。偶々義輝。久秀の專肆を惡み。竊にこれを除かんと謀る。而して久秀これを知り永祿八年五月十九日義輝を二條の第に弑す。輝二弟あり一は覺慶と云ひ南都一乘院門主となり。一を周嵩とて鹿苑院の寺務なり。三好松永周嵩を誘ひて殺す。覺慶を囚ふ。八月細川藤孝幼かに奉して近江に奔り髪を首へしめ名を義昭と改め。足利氏の遺業を恢復せん。時に尾張清洲の城主織田信秀の子上總介信長勇武にして近國の豪族駿河の今川義元美濃の齋藤龍興等を亡はす。この時義昭。信長に依りて京師に入らんことを求むこれより先元天皇詔して義榮を征夷大將軍と爲す。是に至て信長以爲よく。好奇貨居くべしと。蓋し其志依て以て雄圖を啓かんと欲す

將軍を弑す

覺慶髪を首へしめ

義昭信長に依

るにあり全十一年八月義昭を奉じて京師に入る。この時將軍義榮攝津富田にあり病を以て暴卒す。三好長縁。政康等阿波に奔り。三好義繼。松永久秀等皆降る。其他風を望んで來り歸す僅かに數日にして攝津。河内の二國尽く平定す。信長師を返へし。清水寺に館し。義昭本國寺に館す。是に及んで正親町天皇勅して義昭を征夷大將軍とす。信長を從五位下に叙し。彈正忠に任ぜ。永祿十二年正月三好氏の黨大舉して攝津に入る。三好康長。全康政。岩成左道これに應じ將軍義昭を本國寺の館に襲ふ。細川藤孝。池田勝政。荒木村重皆兵を率めて入て援く。信長亦兵五方に將として馳て京師に入る。三好の黨悉く逃る。是に於て信長三好等の邸宅の京都にあるものを毀ち。義昭の爲めに二條の城を築た。自ら妙覺寺(日蓮宗)に居る。翌年元龜元年七月三好長縁。康長等阿波より攝津の國に入て野田福島の間に砦を城た。固くこれを守る。八月廿四日信長三万騎を率ぬ。廿五日河内牧方に宿し。廿六日天王寺に屯し。諸勢は渡邊。神崎。津村。上下難波。木津。今宮。樓之岸に陣を張る。廿七日信長へ一味として三好左京大夫義繼。松永山城守久秀。

義昭將軍とな

三好大坂に據

信長大坂發向

和野田伊賀守。池田兵庫頭等一手になり天満の森に陣す。三好下野守全爲三兩人は三十日に野田を出て、信長に降参す。九月三日三好日向守。全兵庫助も池田より出て、降る。九月四日播州三木別所孫右衛門百五十騎。紀州島山方玉木湯川の兩人より名代として一千餘騎。根來寺衆徒五千人信長が勢として出陣す。四日の曉、將軍義昭下向ありて細川右馬頭藤孝の堀の城に入り。旗本勢二千餘騎總勢六万人なりといふ。初信長石山の地形要害を見てこれに城くの志あり。且つ眞宗本願寺の盛大なるを詳み。(宇録二年加州宮てこれを領し永正三年越中神保、游佐、土肥、権名を伐ち、能登を攻む、國主島山修理大夫)これを滅せんとするの詭謀を懐けり蓋し信長この詭謀を懐くもの前に叙するが如く二箇の理由より來れり。これより先、天文八年葡萄牙の商船多爾ヶ島に來る其人數百餘人二人の天主教宣教師これに乗す一を牟良叔舎と云ひ一を喜利志多孟太と云ふ其教を西國に布く有土の諸侯これに歸するもの多し中に豊後大友義統父子豊後一國の神社佛閣を焼亡し伽藍を破却し神祠佛前にて牛馬を屠殺す薩摩の島津家その不義を惡みてこれを征伐するに至れる程なり其

信長の詭謀

天主教の渡來

南嶽寺を建つ

眞宗徒を斥逐す

上人信長の請を給ふ

敷延て京都に及ぶ永祿九年信長その弘教を公認し四條坊門に南嶽寺を建て到る處新宗教徒の爲めに斥逐せりるを以て兩イルマン本願寺の事を信長に説しこれを絶滅せしめんとす又一方には日蓮宗日乗のこれを幫助するを以て本願寺を他に遷移せしめ。機を察て滅絶せんと欲するの宿謀を懐くこと久し。因て大坂石山の地を本願寺頭如上人に請はしむ。上人、人家臣門末を集めてこれを説せしむ。衆みなその請に應すべかりざる理由を以て開陳するに信長の陰謀に富む美濃の齋藤龍興。伊勢の北畠具教に於けるの事を以て是に於て辭するに當寺は蓮如佛勅を受けて創建する有縁の處にして宗門の繁榮日々に相加へ。且つ久住の地去るに忍びざるを以てす。信長これを聞て云く。僧尼顯如の返事かな。それ出家は肉を裂死。眼を抜死ても人の望に應すべし善なるに儘かの土地を惜む事やある。速かに大坂に押寄せ。一壘の下に踏潰して其地を奪ひ顯如父子の首を刎ね以てこれに報ふべしと。内々評議をぞ爲したりける。されども爰に用心すべしは本願寺の門徒は他の宗旨と違ひ元來信心堅固にしてその法主を親戴し。本山の爲めには水火も避けざる

十八
ものゝみなれば懲に征伐して後の悔を招かんはこれ謀計の得たるものにあらずればとて
今回の發向も全く野田福島にある三好勢を攻ると披露して。その實は不意に本願寺に押
寄せんとすの結構なりと聞へたり。

◎宗主の深慮、石山の備を修む

然るに本願寺にありては顯如上人。豫め信長の謀を察し給ひしを以て羽檄を諸州に飛
ばし急を門下に告げられしに。細素雲の如く集りて護衛する中にも紀伊越前の人馳せ登
りて籠城す。此時下間三家には刑部卿法眼頼廉(法名了悟)按察使法橋頼龍下間少進法印
仲之(法名性乘)(天正八年講和の時)の人々武器あり鈴木飛彈守重倫謀主となりて惣軍の控
御を掌る

鈴木飛彈守の軍謀に長むる人口に膾炙す而して世其人の有無を疑ひ。或は教如上人の
軍略に長じ給へるを以て假りに當時飛彈守と稱せしと云ふ。然れども大坂最初の役は

石山急
を諸州
の門徒
に告ぐ

下間三
家

鈴木飛
彈守の
存否

元龜元年にあり教如上人は永祿元年九月十六日を以て生老此年僅に十三歳。天正八年
顯如上人大坂退城の時教如上人(二十三歳)信長の志謀り難死を以て再び守備を修む
因て信長これを攻しか共久く保つこと能はせ。遂に夜を以て遁れしより見れば。其軍
略に長きといへることは信せべかり。香川正炬の記に依れば惣軍の謀主は鈴木源右
衛門なりと云ひ。又處々鈴木伊賀守といへる人を出す且つ大坂定専坊に鈴木飛彈守。
重倫の書數通を藏す今其一を録せば「貴墨令拜見候。拙者儀今般結構成御役替被仰付
其上御加増致拜願難有仕合奉存候。依之爲御祝詞預示。委曲入御念候趣辱奉存候。恐
惶不宣。六月廿五日鈴木飛彈守重倫花押定専坊御報」とありこれ等によるとはその
人の現存疑ふべかりと只博覽君子の考証を俟つ

其他一味籠城の人々には下間出羽守。全近江守。本多佐渡守。山名内記。河那邊主馬助。
八木駿河守。森左近。山田新介。佐々木承正軒。全將監。細川主馬助。全和泉守。野島
主水正。河島水之助。今井權七。鈴木伊賀守。荒木信西軒。全久藏。上原傳内。全主膳。

籠城の
人名

野坂一學。下村右近。村上利介。嶋田河内守。野里三右衛門。益田覺也。藤井大郎右衛門。全藤内。平野大學。堀尾西賢。下間三位。全源七郎。全源太郎。全源五郎。津筑次郎右衛門。三林周防守。中村登岐守等なり

坊主衆には端坊。東坊。正應寺。上宮寺。阿彌陀寺。無量壽寺。報恩寺。勝願寺。妙安寺。如來寺。枕石寺。信樂寺。弘徳寺。壽命寺。常弘寺。淨興寺。法光寺。常滿寺。願誓寺。定事坊。願泉寺等なり。

籠城五
万三千
人

御一門には新門跡顯如上人。興門主顯尊上人。其他常樂寺。願入寺。圓興寺。常稱寺。光善寺。顯証寺。毫攝寺。西光寺。本泉寺。松岡寺。勝興寺。瑞泉寺。本宗寺。願証寺。光應寺。興行寺。眞徳寺。本徳寺。恵光寺。願徳寺。超勝寺。教行寺。慈敬寺。常願寺。証願寺。願行寺。光敬寺。興善寺。明願寺。眞宗寺等なり。この勢都合三千餘人。外に雜兵五万餘人嚴重に守備をぞ爲したりける已上の中紀州雜役の人々の祖先は源九郎義經の御内にて名を得し鈴木維井が嫡孫なれば。その姓氏も正しく。武勇の家筋れば。信長の

大阪の
守備全
く成る

輔佐たる柴田。筒井。瀧川などに劣るへ死ありき。況して羽柴惟任などとは同日に論すべかりき。これ等の何れも篤く眞宗の教に皈依し。今度法門の一大事なりと考ふるより命を鴻毛の輕に比して報謝の經營に擬せんとし。又この他にも全國到る處眞俗組合て城を守り。關を堅め。内外相應じ。自他の虚實を考へて備を爲し。又在々所々に忍ひの使を回はし。石山本山に於て早鐘を撞くことありば敵軍攻寄すると心得て石山に來るに及ばせ。所々にて裏切し。敵川を渡さば橋を落し。船を流して歸途を絶ち。若隙ありばその陣屋に火を懸けよと一々に持旗を爲し。上に云へる如く石山の地盤にして且つ同信同行の人々が法門護持の爲め。籠城する事なれば信長云何に勇武なりとむ。容易に勝を制せしむべしやと人々勇氣を奮ひけり

●初度の合戦、信長の肝膽を破る

されば織田彈正忠信長は野田、福島に在る三好の勢追討の爲めと聲言し。その寶石山本

七日信長天満に陣す

十日船橋を架す

十一日小戦

信長を驚かす

願寺を攻めりるべし謀計にて。九月七日天王寺より中島天満の森へ陳所を移さる。これより前大坂天満宮の拜殿には一揆より放火を爲し居死ければ。信長森中へ野陳をぞ張られける。(放火の事細川両家記による)

十日中津川に船橋を架す七十二年前畠山尾張守河内高屋より攝津に入りて天王寺に陳取せりれし時渡邊。長柄に川を架したる時何の詮もなく高屋へ歸陳ありたることありしが今度の船橋も不吉の例なるべしとの世評なり也。

十一日信長勢福島堤へ打出けるが大坂城中よりも打出。互に砲發す信長勢の首級七を獲十二日義昭中の島。蒲江の古城へ入りる。信長。藤孝もその近邊に陳を張る。海老江堤。田中にある先陳は石山勢と相距ること纒に三町餘なり。この時石山本願寺にては野田、福島にある四國勢(依然その勢を保たんか憂ふべし)にありざるも。若し彼れ城を保つこと能はせして敗走することありば。石山本願寺獨りその衝に當らざるべかりき。今の中に兵威を觀して。敵軍の膽を驚かしむべしとて。夜半に寺内の鐘を鐘々と撞死鳴せば。四

十四日石山勢を誘ふ

方に相圖の爲め搦へたる鐘樓にてはこれに和して撞死立れば人數矢庭に集りて門の聲を作りけるな信長の陳にては敵逆寄を爲せしやとて大に仰天しけるとなり(細川記に依る)十三日未明より西風俄に吹起りて沙塵を捲死。屋瓦を飛し。高潮満上りて淀川の水逆流し。石山、四國勢は海若味方に力を添へたまへりと悦び人夫を出し。處々の堤を決壊しける程に洪水蕩々として逆捲死。信長勢の陳屋を浸しける。大雨は宛り車軸を廻りすか如く降頻るゆへ川の上下方角をも定め兼て非常に困踏を極めたり十四日石山城中には術計を以て信長勢と一戦しその強弱を試んとて森口の青田を刈て敵を阻引せんとて足輕四五千を出しける。寄手の中佐々木内藏助成政これを見て信長の陳へ進進す。石山の方にては固より期したることなれば敵陳の動靜を窺ふに信長これを聞くや否諸軍に下知してこれを討しむ。佐々木内藏助。林新三郎。井上才介。福富平左衛門。野々村三十郎。湯淺神介。野村越中守。金松又四郎等。中島より河中を眞一文字に打渡りて石山勢に攻掛る。味方はこれを相圖に敵々と早鐘を撞死出せば。これを聞く僧俗男

野村高勝討る

信長天満の本陣を焼く

信長勢三千餘人の死傷

鈴木再守をひ修む

女思ひくく得物を提げて打て出づ。城中にも七八千挺の鐵砲を二手に分けて交互射出しければ。寄手の先陣忽ち射立られ引退く敵の後陳代進むを見て紀州雜賀の鈴木孫市が一族。越前の下間が一黨。宗徒の陳と覺し死處に切て蒐る。寄手も流石佐々木。福島。湯淺。金孫皆々大剛のものなれば。少も擬議せせ。互に能敵を討取らんと鎗を削りて争ひしが。野村越中守高勝を討取る。(この時大坂にて高勝を討取りしもの)この勢に乗じて烈く戦ひければ敵の堪へ得せして散々に敗走す。この時寄手の大將前田又左衛門利家(後に加能、三州の大守とす)取て返し。鬼神の荒れたる如く右に突死左に當り。勇を奮ひければ。毛利河内守。湯淺神介。中野又兵衛等助け來りて漸く殿として退く。この時味方の者にて信長の天満の本陣へは火を放ちて焼ければ猛火天を焦さんとするの勢あり。又一揆とも所々に陣の聲を揚げ。その先途を遮りければ。寄手混崩れに敗走す。信長は辛くして本庄の付城へ入る此時寄手三千餘人の死傷を其中に信長の方にて宗徒の者と聞へたるものにて美濃國願誓寺の見知りたるものは。織田新八郎。氏家内藏介。合九郎五郎。全助八郎。佐

々木小太郎。湯淺六郎。野々村喜太郎。林新一郎。全新九郎。池田庄太郎。全小次郎。福富十郎兵衛。酒井五郎兵衛。金松仙。小川太八郎。堀小介。深川玄蕃。加納將監等なり。其外具に記すること能はざ。已上の人は武功に名を著はせしもののみなれば。信長殊に遺憾淺かりき。拳を握りて石山の方を睨みて憤怒深かりしといふ(十六、十七の兩日は戦争を留めて和睦の談ありしも嗣後すす細川記に見ゆ)

●中島の劇戦、信長勢敗を取る

鈴木飛彈守重倫は今度信長の勢を中島に敗りしかば必定その憤深く。重ねて天王寺森口より攻寄すべし。これを防禦するの手段こそ肝要なりと。天王寺に城塞を構へんとその準備なりしに。全寺より種々斷はりありしかば五町餘を隔て。勝臺の塔に一の出城を置死。其外木津。難波の森。玉造。傳法。大海。飲滿。鴨野。久寶寺。出江。小濱。佃。尾崎。花隈の各地に將士を居死。樓の岸。本庄へも人數を込め。堅固に構へて持久の謀を爲す。然るに寄手の方にては多くは長袖百姓原と侮蔑しむ。鈴木。下間。湯淺。佐々木など近國に

十八日
信長奇
兵に敗
る

武名を以て知るゝもの多く。その虚實進退一々其圖に中りけるより。容易に破るべし
 の敵にあらずれ共。今一度押寄せて攻めばやとて十八日中の島の民屋に火を懸け。男女
 老幼を問はず。當るを幸ひに難立たり。この時大海の出城には鈴木伊賀守三百餘の小勢
 にて楯籠り。所々修造してありけるが。信長勢の働く有様を見て。城中には近所の一揆
 人足を留め。疑兵を張り。自身は手勢を引具し。打て出ければ。飯満。本庄の塞よりも
 同く續て馳せ向ふ。石山城中にはこれを見て味方小勢なれば。縦ひ一戦に利を得たりと
 る。敵に跡を跟りねば。塞を彼れに取るべしとて。搦兵一萬を繰出し思ひくりに打
 て出で。信長の前を遮り。後を絶つ。寄手忽ち切崩され。此の堀。彼所の沼へ追込れ。
 矢筈に七百餘人討取けり本城より討て出し一万の兵も皆中の島へと押渡りぬ。信長勢も
 爰を先途と相戦ひ。味方は備を堅固にして。弓鉄砲を前に居死て切伏よと佐々木。福富。
 堀。前田など大音に名乗かけ。藩直に切蒐れば。石山勢もこの剛手に距立られ。散々に引
 退く。されども寄手も用心して伏勢をや置たるかと左右に目を取り。徐々後を追蒐た

七百餘
人の死
傷

信長勢
死傷五
百餘人

り。城兵もこゝに取返す。池沼を前面に當て。鉄砲を備へ敵を引付射立んとす。寄手
 これを距崩さんとて馬を驅立るも。池沼なれば自由を得ず。怒を香て控へける。この時
 死傷五百人に及ぶといふ。かく死傷の多死所以。この大阪の鉄砲隊は二十五人に一人
 の小頭を置死。五十人を一隊として下知を加へて射させける。中にも妙手と聞へしは螢
 小雀。下針。發中。但中など云へる手練にて越前。加賀。紀伊。丹波より馳集りたる兵にて
 心も剛に力も強く目も利たるもの共なれば浮矢は更になかりしといふ

●石山の尾撃敵軍を困蹙す

越前の朝倉義景。近江淺井長政(小谷の城主)連衡して大津。醍醐。山科を焚死延曆寺の衆徒
 と謀を合して信長の飯路を斷つ。信長大に愕死。倉皇として義昭と共に退陣の用意を
 爲す。十九日この事石山に聞ゆ。城中には信長謀計を廻りし態と退陣なりと披露して味
 方に油断をさせ。一度に勢を出して不意に城を攻る事やあると。若々に軍兵を込め。

朝倉淺
井兵を
出す

石山勢
信長の
退陣を
尾撃す

石山勢
前田柴
田に敗
る

信長大敵なれば退くとも濫りに跡を付くべからず。若時機を見はその將帥より下知を傳ふべし。これに背死たりんものは法敵に均しかるべしと堅く禁制せり。

翌二十一日の早曉信長の勢淀川に添て上り。一ツ屋の付城に軍勢を込め江口川の船橋を渡し。徐々と退陣す石山に堅く敵を尾撃することを禁せられしむ。血氣の速り若武者忍びくくに鎧を巻死。旗を收めて森口へ討て出。六千餘人一手に成り。吹田・鳥羽へ相圖して攝州島上、島下二郡の勢を催し二十二日の午刻信長の勢江口を渡すを見るや否俄かに兵鼓を打。螺を吹死て鈍々と攻掛る。されとも信長は流石は武將の事なれば。一備々々隊伍の列を正くして退かれけるが。敵の尾撃するを見て取て返し。騎馬の兵を前に排へ。足輕を先に立て扣へたり。石山勢も敵の備の堅固なるを見て。案に相違し。互に躊躇して居たりける所に。前田又左衛門利家。柴田修理亮勝政。など烏合の一揆勢率一當に蹴散さんと數千人の手勢を帥て切て蒐る。石山勢無難突立られ。散々に引退く。討るゝもの數を不知。一人も残りす討るへ死景況なりしに。寄手の付城一ツ屋に失火ありて

信長江
州發向

その傍近にある陣屋とも焼ければ。寄手は此に驚死て驚破敵の別陣寄せたるぞと。混騒に騒死立て。吾一早く通れけるにぞ。百姓一揆在々所々より調を作りて騒ぎければ。淀川へ陥りて死するものも多。一揆の爲めに討るゝもの若干なり。江口より山崎迄は草木揉碎たる如く死骸路傍に滿ち漸にして山崎に陣を張りて夜を明し翌日京都へ入る

細川記に依るに廿二日信長の諸軍敗れたる爲め天満の陣所へ引退死廿三日早曉中津川に至りたるに橋は夜前四國衆より切流され。船橋を渡りんとするもなし。依て徒渡す一里程を行けば。大河あり。江口河と名く。同所の船も皆切流さる。よりてこれるかち渡をなす。その困難云はんかたなし。鳥飼邊にて從軍の士卒に暇を賜ひ。各その城地に就かしむ。義昭。信長。藤孝は入浴ありて二條の城へ入るとあり。されば尾撃は江口の間までにあるが如し

それより江州に發向ありけるに淺井。朝倉の兵は退て叡山に據る。信長使を叡山に遣し。衆徒を招諭せしめて云く。今吾命に従はせんば必き全山を藉にして止まんと。衆徒これ

信長叔
山を焼
亡す

上人の爲
亡に法
要を修
す

信長の
將校の
策を畫
く

に從はせ。信長曾て叡山の驕傲を惡むこと久し。然れども敵軍盛にしてこれを懲らすこと能はせ元龜二年九月十三日四面兵を合せ圍み。火を縱ちて伽藍を焼た。山徒を斬獲して殆んど唯類なし。桓武天皇延暦七年比叡山開創より是に至て七百八十四年金碧輝煌たる殿堂一炬の火に燒盡しぬること實に淺猿死限りなり。これは後の事を因は記するものなり。されば信長は朝倉淺井の兩家とは戰なは止まを越えて十一月に至る是に於て將軍義昭親より三井寺に至りて三家の和睦を謀る。天皇亦詔を下し。勅使を差遣はさる。是を以て各和を議して罷め歸る。この時江北の諸寺院は一致して淺井備前守長政と一味して加勢すといふ(今當時の状況を考察する爲めに記せば、天正元年九月江北十ヶ寺即ち福田、福勝、眞宗、淨願、出相(出合)之儀聖停止候事。一彼衆死去之時勿論參候事一切有之間敷候付志被下。少も取申間敷候事。一上下主同びし(非時か)の衆左儀候事可爲同前各々具可申渡事。右の旨萬一破申候は。彼衆可爲同然事。此上にも相背候は。尋も如來上人儀可蒙御符者也依如件とあり又淺井長政九月廿二日十ヶ寺(回章の文) 廿五日より七日迄石山第二編史御覽の中にあり。蓋し當時獨に石山と相盟約ありたるを証すべきが如し) 廿五日より七日迄石山本願寺にては頭如上人戰亡兵士の爲めに法要を親修し給ひ三部經を讀誦あり。一日三時願る丁寧なりといふ。上人數日の戰爭にて討死したる事を語り出たし給ひて我法門の斷

絶せんことを恐れてかく防禦に及ふとは申乍ら。多くの戦亡者あることの無邊さよとてはどく紅涙に袖を絞り給ひければ。これを聞く信徒のものは。誠に自他不二平等の御慈悲の程こそ難有しと一層感激を添て。法門の爲め骸骨を曝さんことを思ひとす。

●信長の遠謀、羽翼を剪る

信長兩度の合戦にて長袖一揆とのみ思ひ侮蔑て利を失ひ。剩へ大將までも討せしかば。憤怒遣る方なれも詮すべし様なく。大に焦立てありける處。柴田勝政。瀧川一益。羽柴秀吉等信長の前に出で、云ひける。大坂の城兵恐るゝに足り老候へども。全國に滋蔓せるの門徒一命を抛ちて籠城する中にも伊勢。越前。紀州の門徒等尤も強く候也へ。所詮その根たる者共を攻め亡さむは。何程大坂を攻るともその甲斐なかるへし。唯大坂を捨置かれ。諸國の眞宗門徒を征伐して。之れを攻め亡されんには。石山は獨り落城すべしと諫めける。信長もこの儀尤なる次第なりとて元龜二年よりは大坂へ出陣なく。只管諸國

長島を
攻む

の門徒を征伐せしめけり。
天正二年五月信長伊勢長島の願證寺へ攻寄す。初度の戦は奇手利を失ひ。美濃大柿の城主氏家ト全討死し。柴田勝家。伊賀範俊各々創を蒙る。信長火を民屋に放ちて歸る。尋て別所、片岡の二城にある門徒を撃つ。風雨甚だ烈くして夜闇し。門徒路を遮る。この時林新三郎討死す

信長
嶋を屠

同三年四月信長重て長嶋を攻めて之に克つ。この時願證寺佐禰討死す城兵力尽て降を乞ふ信長陽てこれを許し。伏を設け男女數百人を砲殺するを以て餘衆大に怒て信長の軍に切蒐り。その本陣を目掛けれども誤りて一族の陣へ入りければ。信長幸に恙な死を得たるもその討たれたる人は。信長の異母兄。津田大隅守。全弟半左衛門。津田市の助。全舎弟仙。全又六郎。同孫十郎。赤見左衛門。大野左次八郎。佐渡民部大輔。坂井七郎左衛門等なり。この時一揆の大將は下間三位なり。所々の合戦に味方三百餘人を失ひ。七十餘人討漏され。國を衝て突出し。大坂石山へ入る

信長の
一族の
十人討

上人御
書を諸
國に遣
はさる

天正元年八月十五日信長朝倉義景。淺井長政を攻亡し。その餘威を以て越前の眞宗門徒を退治せんとの結構なる由。石山城へ櫓の齒を引く如く注進ありける由。大坂にては彼國平治の上。必定當城を征伐あるべし。由々とかうざる大事なりとて顯如上人に殊に尊慮を痛めさせしめ諸國へ御書を遣はし給ひける。

今度越前へ敵亂入の由候。此上者當寺の一大事に候。籠城に死はまり候。しかればいづかたも頼むべし心懸の衆。申合參上候はゞ。賊以有難く。彌たのもし死次第たべく候。不信心の面々は片時急で信をとり候はゞ。ありがたかるべく候。猶端坊可申傳候。穴賢々々

八月廿五日

諸國坊主衆中

門徒中

顯如御判

越前加賀に略せしむる

全三年八月朝倉の餘黨越前に起り。信長。其子信忠と師を率ゐてこれを伐ち。下間已下悉く戰没す。加州の一揆蜂起するを以て。柴田勝家を遣して之を平ぐ。本願寺の加州を領する八十三年(能登、越中を領す。永正三年より)こゝに至りて亡ぶ。これは後の事なり。されば一度びこの御書諸州に下るや。全國の信徒は取る物も取敢へせ。石山へ楯籠り。或は兵糧彈藥を百里の遠に運び。處々に隍を穿ち。柵を結ひ。彌々城廓を堅固に構へたり。

● 十艘川の戦、村重智謀を奮ふ

十艘川の戦

天正三年三月中旬某日石山より大和田(大坂西北一里餘の處にあり)に出城を構へ。下間某をしてこれを守らしむ。時々渡邊神崎。十艘川へ軍兵を出して侵略す。この時荒木村重攝津を領す。村重の兵これを見て未明に襲はんとす。石山勢これを探知して川の前岸の堤下に伏兵五百騎を置か。鐵砲を裝置してこれ待つ。村重部下の士北川市之允。全新五郎等數十人これが爲めに討たる。村重其宗徒の者の死したる爲め大に之を怒り。一

村重大和の勢を破る

日自ら雜兵に粉裝して其隊伍に雜り。敵兵の衆寡。地理の陰易を察し。その勢を三分にしてその一を出す。味方これを侮慢して。隊伍を崩し。流れを亂して攻む。敵遁る眞似を爲して引退く。大和田の勢一半川を渡る。村重急に令を傳へ。俄に軍裝を改めて。自ら眞先に進んで下知するを見て有幣一揆の事とて一支め支得す。吾れ先にと遁れ行くを。急に川岸に追詰めて討ければ。半川へ溺れて死するもの多し。村重此勢に乗じて。大和田の城へ押寄せ。一時にこれを攻取り。石山を指して逃れ行くものを。追討ちて終に天滿の惣搦を破りける。死するもの一千五百餘人信長方の勢この一戦にこれ迄の耻辱を雪ぎ。何れも喜を表したりと。それより講和に至る迄村重の領地へは一揆の勢再びす歩をも入れざりといふ

● 再度の合戦、信長森口に敗らる

天正四年四月十四日長岡兵部大輔藤孝。荒木攝津守村重。惟任日向守光秀。原田備中守宗

天正四年
信長三万騎
を率て
大坂を
攻む

伊賀守
三百人
を以て
一万五
千の兵
に當る

行、筒井大和守順慶等信長の命を承てその勢都合三万餘騎大坂に馳下りて。石山本願寺を
ば攻めすして。先森口表。大海。飲滿の兩所を攻取らんと欲して軍を二隊に分ち押寄たり。
大海の城には鈴木伊賀守三百餘騎にて一万五千の大敵を引受け。些ども擬議せず。鐵砲
を以て散々に射立ける間。さしもの大軍退くこと自由ありざれば。寄手の先陣死傷數を
知りぞ。漸くにして木陳へ引返す。この日伊賀守の手にて放ちし三百發の鐵砲に浮丸只
三個なりしといふ。其激戦なりしを知るべし。全日飲滿に押寄たる兵も同様敗蹟せりと
いふ。總じて大坂の出城。中間村。鳴野。野口。樓岸など東西北の三方の沼澤繋回して。一
里二里の間は往來の途を斷ち。唯南方の一口平地にして馬蹄を驅るの便あり。これに因
て信長奇策を回し。天王寺邊に陳を張りて敵をして専ら南を防ぐに力を尽さしめ。そ
の虚を窺ひて中嶋の方より不意に石山を討たんとす。結搦なりと知り。因て天王寺に向
城を搦へ。原田備中守宗行を大將としてこれに込め置た。第一に勝鬘の出城を陥れん
とす。その距離相去る纒かに五町許なり。

原田備
中守苦
戦す

狂歌を
以て備
中守を
嘲る

十八日木津の出城より少く兵を出し筒井順慶が勢と追合けるを見て。勝鬘の城よりは木
津の加勢として下間三位。全源五郎。全源七郎。津筑次郎八。堀尾願西等討て出。無二無三
に相戦ひ筒井が足輕どもを一人も殘りぞ討取。勝鬘を揚て勇みたり。原田備中守天王寺
の城より香にこの体を見て。吾れ籠城の手初に一揆盡を討取て。軍陳の血祭に供ふべし
と。已れ眞先に進んで。あの勢討取れと下知すれば。勝鬘勢は勝誇りたる勢に何かは猶
豫を爲すべし。双方互に渡合ひ。一足引かき勇を鼓して戦ひたり。斯る所に木津の城
よりは石山方にて鈴木孫市。全一楠。土橋平次。山田新介。村上利介など云へる一騎當千
の名ある勇士等。味方討すな助よとて。眞蕪に押來れば。原田備中守敵を左右に引受た
るより。思ふ存分に勇氣を奮へども。最前よりの戦に疲れ切たるその上に。新守の鈴木
土橋に不慮を討たれて叶ひ難く天王寺の城へと引退く。されども昨今俄の普請なれば塀
柵とても抄々しかりざること故。敵に付入りれ。こゝをも叶はせ住吉の方へ引退く。その
時誰が所業にや社頭の華表に一首の狂歌を記して立てたりける「武家の飯(塀)くりぶ左

衛門かひもなく住吉さして引や注連繩とこれは原田備中守前年即天正三年迄は塙九郎左衛門と稱しけるを信長天朝に奏聞して塙を原田と改め備中守に任官しけれどもその已前の名を讀みけるといふ

廿三日

廿三日羽柴筑前守秀吉佐久間右衛門信盛數万騎にて打て出木津勝曼の二ヶ所に押を置死重て天王寺に付城を築けり

廿六日

廿六日磯邊勝願寺佛照寺鈴木一楠等大將にて泉河兩州の速雄の若武者を率ゐて不意に住吉に押寄諸社に火を放ちける間原田此處にも居堪りて散々に敗走す

●宗行の憤死、信長石山を攻圍む

原田備中守宗行は己が血氣の勇に任せ鳥合の門徒等何程の事かありんと思儼り只一戰に颯散して大勇を顯し功名を輝かさんと欲し泛々と戦ひて一戰に打敗られしのみか住吉さへも破られ年來の武名は一時に消えて諸人の嘲りに懸ることこれ併り

原田宗行の憤

信長原田の天守備を奪ふ

佛天の咎むる所なりん。今は世に存生ても何にかせん。敵は極めて先日の勝軍に誇て再び天王寺へ寄すべしこの時一生の勇武を奮ひて會稽の耻辱を雪ぎ死するとも生るるも只運を天に任すべしと觀念したること憐れにも又殊勝なり。然るに信長は原田兩度の敗軍を聞て大に怒られ宗行をその面前に召し斯程の大臆病者を天王寺に込置たりとて再び敵に陥られ只敵に氣勢を添るばかりなれば天王寺には佐久間信盛父子を籠らせ原田は長岡荒木等が手に從て石山勢を押へ天王寺の付城を堅固に經營せよとの下知あり原田宗行はこれを聞て悄然として吾家に飯り家の子郎等を召して涙を雨落と流して云く吾近年所々に於て武勇の譽を顯はせしことは普く世人の知る所なり。然るに云何なる事にや兩度の戦に失敗を取り天王寺の在番は佐久間父子に命せられ今他の麾下に屬すること何の面目ありて亦人に見へんや。只此上は手勢を以て石山に押寄せ諸人の目を驚かすほどの勇戦を爲してそれを死出の土産となさん汝等我最期の有様を見置て故郷に飯りこれを妻子に告げよとの事に多年恩顧の家臣どもこれを

開元君の御厚恩云何にして忘るべし。只御供仕りて潔く討死し。冥土九泉の外迄も君臣の義を立て可申とぞ述べたりける然るに信長より木津の砦を乗取て味方の勢を入置くべし。左なくば石山の攻口便り悪かるべしと下知を傳へられ。檢使として猪子兵助。大津傳十郎二人を差下されける。原田備中守これを聞てこれ我が最期の時至れりと悦んで君臣共に訣別の酒宴を催しける

五月三日の戦

五月三日三好山城守笑岩(康長)紀州根来の衆との外和泉河内の加勢のものを以て先陣とし。原田備中守後陳となり。部署各々定て木津の城へ押寄たり。この時木津には下間出羽守。八木駿河守。木津願泉寺。江戸報恩寺。本多土佐守。鈴木孫市。全一楠。田邊平次。山田新介。村上利介。山名内記。益田將監等討て出で。鐵砲を以て散々に射る。寄手の方三好根来の兵は信長に一味の符として前軍に加はるも。固より心石山にあれば只形ばかりの戦を爲して引退く原田備中守は兼て期したることなれば。爰ぞ晴れの一戦を爲して討死すべしとの場所なりと思へば。烈く手勢に下知を傳へ。無二無三に切て蒐る。これを見

激戦

て先に引退たる三好等の勢も後日信長の怒を恐れて返り救ふ。この戦卯の上刻に始めて極めて激く。切つ切りれつ。その間互に勝敗ありけるが。原田は今日こそ最期の軍なりと。兼て覺悟の事なれば。鋒先日頃に十倍し石山勢も避易す。已の上刻に至て大坂に失火あり。商家十餘軒に燃付。烟相近傍を蔽ければ。木津勢はこは云何なる子細なりや。本城心許なしとて引色になりければ。原田は一倍勇氣を増し。すは敵は退くぞ。跡追蒐て一人も洩りさせ討取と眞先に進んで下知すれば。寄手の勢はこれに鼓舞せられて我劣うと追蒐る。下間已下十二人の大將分の環は何れも武勇の譽を得たる者のみなれば何條これに後れを取るべし一度に馬の鏝を返して爰を先途と戦ふたりその時難波の出城にある河那邊主馬介。八木左近。森三河守。野里三右衛門。西川新太郎。佐々木將監。荒木信西軒。中村登岐守等七百餘騎にて切て出。敵の右方へ押回し。その横側を討んと進んだり。寄手は云何ぞ猛死兵とは云へ。今朝よりの激戦に疲れ。且つ素とよりその身金石にありざれば各々數ヶ所の創を蒙り。退色に見へける處へ。益田將監は原田備中守と

原田宗行
討死

渡り合ひて戦けるが。原田は踏死して深田の中に陥りける處を益田將監首を取大音聲にて敵の勇將原田備中守を益田將監討取りと誇りける。之を見て福喜三郎。全小七郎。氏家左近。箕浦無左衛門等今は生死ても詮なしと同枕に討死す。因て寄手の惣軍も各々首領を失ひて一度に颯と崩れ立。石山勢はこれに乗じて急に追撃。數百人を討取。天王寺へ追行て城に火を掛けて退死たり

●石山の秘計、敵軍の銳を折く

信長大坂の戦利ありきして原田備中守を始め。宗徒の勢五百餘人討れたるの報を聞きや否。こは勇々として死大事なり。率乃公出陳して石山を一撃の下に打破りて日頃の鬱憤を散じ。且は戦亡の士卒を吊せんと袂を投じて立ち。五月三日大軍を以て石山發向を下知せられける。此由京都。伏見。鳥羽。淀の門徒より追々と告げ来るを以て。顯如上人。教如上人。一家衆。並家老等防禦の評議を爲し。惣軍へは酒肴菓核を賜ひてこれを慰撫し給

信長大坂に出陳す
上人士卒を慰撫す

五日上諸軍に懸給ふ

部署準備を定遊軍七千人

ひければ。各々上人の徳に感じ。憐れこの度命を捨て、佛祖上人の恩徳に報ひんと。何れも勇氣湧々として只管敵軍の寄せ来るを待擗たるその景況は頼母敷こと思ひれたり。全五日顯如上人は處々の檜へ上り給ひ。諸軍へ對して釋朗かに宣ふ様は。合戦の號令は部下の大將へ傳へ置ぬ。各々その下知に違背すべかりき。後世の一途は只一念發起平生業成の安心に住し。報土往生の素懷を遂ぐべしとありければ。これを聞く諸軍勢は皆難有とて感涙に咽びて合掌し歡喜稱名の聲は全軍を動かして轉勇氣を鼓舞しけり。石山の城には柵。逆木を五重に付け。其中に徑五間の隙を穿ち。其外に惣堀あり。城中には惣軍六万餘人。其中に下間三位。八木駿河守。鈴木孫市。全一楠。田邊平次。根來小密茶。山田新介を大將として究竟の邊兵七千餘人を撰抜してこれを游軍と定め。敵軍を十分に困引て地の利に就て戦を決せんとし。又出城々々には多くの軍士を加へ。多く鐵砲を備へ付けしむ。又殘る五万三千の兵は。信心堅固にて法門護持の外亦他志あるものに非れば何れも武器を利死て只信長の來攻るを待擗へたり。

五日河内若江の城に著あり其勢八万餘人なりといふ
 六日信長惣軍を三軍に分ち。卯刻に天王寺に着せしむるこれを見て勝慢の塔。木津の砦は其衝に當れば定めて一番に寄せしむるべしと鐵砲に彈丸を裝ひ。矢束解て待拂たり。信長もこの程筒井原田が利を失ひしむる全く彼出城より不意を撃ちし故なり。小敵なりとて決して侮るべからずとて何れの城へも軍勢を差向けしむる。然るに石山七千の遊軍は敵を挑んとし天王寺近く馳出で、鐵砲頻りに打懸る。寄手の先陳の佐久間右衛門尉。池田丹後守。長岡兵部大輔。松永彈正少弼なりけるが小敵なりと見ければ。一戦に追立て。高名の一番筆に付んと進んで失合す。大坂勢鐵砲の手練多かりける故入替て放掛くるを寄手の先陳將基倒に倒れて。色めく處を七千餘人兵圍に成て喧嘩喚て掛りける。佐久間池田も勇將なれば得たりと双方互り合。鋒先より火花を散りして戦ひけり。寄手かく突立りれて少く退けるが。石山勢少めこれを追掛せ。颯と引て本の所に備へたり。寄手も取て返し。互に睨み合て居たりける。信長これを見て斯程の小勢に時を移すことやあ

る。洩さず討取と焦立て下知を爲し。自身眞先に進んとせしめしかば。羽柴筑前守これを見て。秀吉が在ざらん限は御手をも下さるべしとて代て眞先に進みしより。中村。堀尾。美藤。神子田已下の者共一番に鎧を入。曳々聲を揚て進みけるを見るや否。諸軍勢も一度に討て蒐りけり。大坂勢は只管敵を圍引んが爲めなる上。殊に大剛の羽柴の鋒先に當りれて一支もせせして大坂へ引退く。信長氣色快然として云此勢に石山城に付入れよ。透間あらずなど油断なく下知ありければ。諸士競ひ進で短兵急に追掛る。七千の遊軍は兼て隙と合たるとなれば。敵柵近く寄するど見るより七八隊に分れて一度に颯と引退けるを敵は跡より付入んと既に柵を破りんとす味方ば思ふ存分引寄せ筒先揃へて雨霰の如く射出しける。されども勇將の下翽兵なしとの諺の如く。大將は信長なり。これに隨ふ部下の人は羽柴。々々田等の勇將にて率ゆる兵卒も勇敢決死のものゝみなれば。突進も耐えも事どもせせ。中にも長岡藤孝の家臣松井佐渡守康之諸勢の眞先に立て下知を爲し御五六寸の角柱の三丈許なるを宛め水車の如く振廻はし五重に結たる柵を難なく打破り

石山の
柵破る

五間の隙は死人を以て埋め。宛々平地の如く成り。今は假に付たる塀一重のみを隔たる
 斗りになりたれば。弓。鐵砲の長兵は却て何の用をも爲せ。只鎗。劔にて渡り合ひ手詰
 の勝負となる。敵の八万。味方の六万。馬烟塵として関の聲。矢叫の音相和してその
 凄き事は百千の雷霆黒雲を捲来るに似たり。然るに獨り寺中のみ聞然として聲もな
 く。寄手は已に假塀を今や打破るべく見へたる處に。己の刻に至り顯如上人紅の道服
 を着し軍揮扇を持ち多くの侍僧に圍繞れ給ひて高檜の上に登り一聲和念の利劔を揮へば
 八万四千の修羅を降すと唱へ給へば。邪見無惡の輩は上人を謝伏せよとて筒先を向るも
 われども。流石猛勢の積込たる中なれば手前自由なり。筒先虚空に向ひて檜の邊へは
 近付せ。斯る寄手の中には歸依の御門徒も數多ければ。その出座を見るや否。弓も鐵砲
 も地に擲ち。異口同音に合掌し諸の雜行雜修自力の心を振捨て、一身に阿彌陀如來を頼
 み申て候。吾等が後生の一大事を御助け候へと唱へければ。上人金の圓扇を閃々として
 招光給へば。南無阿彌陀佛くと唱る斗りなり。味方の勢は上人の出座を見るや否。命

顯如上
人出座

寄手弓
矢を拋
て渴仰
稱名す

石山勢
奮ふ

六字の
旗

早鐘

石山勢
敗走す

の惜むべし。敵の恐るべしをも打忘れ。海嶽も音なりざる如來祖師の御高恩。當善知識
 御化導の御恩に報ゆるはこの時なり。率討死してこの佛敵を除かんと矛穴より鎗を突出
 すもあり、柵の破れより切て出るもあり。一時に敵を挫かんと命を懸けたり。輕んじて。
 爰を専途と防ぎ戦ふ。斯る折しも紫縮緬に南無阿彌陀佛一心不亂と鎗泥にて書たる旗
 を颯と指擧ると均く早鐘敲みと撞出せば。最前より寄手銳氣を折死たる上。この早鐘は
 櫓こそありめど。臆病神に誘はれたるにや。何事とは知りざるも辰巳の方より裏崩れし
 て未申の方へ引退く。羽柴。佐久間。筒井等の諸將は云ふに及ば老一隊々々の裨將はこ
 は何事ぞ返せ戻せと下知しければ。一旦崩れ立たる勢。誰かは一人も踏止るべし。惣軍
 混崩れに崩れて一度に墮と潰れけり。城中七千の游軍は。敵の崩れて退くぞ。討ぞれや
 者共と。吾先にと討て出づ。寄手八方に餘る大勢なれば。引返して防がんと思ふ兵幾百
 千かあるべし。斯る時の慣はしとて前後左右より崩れ掛りしことなれば。雜沓して自
 由なりざるも。討る、もの數を知りせ。されども石山城中にてはさしむに勇武謀略に

石山衛
を嚴に
す

信徒大
坂に集
る

一揆信
長を困
ましむ

富む信長の事なれば。云何なる術計のある事かあらんぞとて櫓々に鐵砲を配り。處々の門扉に兵卒を増して外へは一人も出さざして控へたり。然るに近國の門徒どもの中にて老年又は幼稚の者ども大坂に加勢の志はありと雖も籠城しては親は子の爲め。子は親の爲めに心引れるのみなりぞ。却て足手纏ひに成るべしとて。己が在所にある。大切なる御本山の容子云何あらんかとて遙に大坂の方を見遣りて氣遣ものも多かりけるが中には堪兼て二十人。三十人打連々々大坂近來りけるもの此處彼處より集りて一万餘人に成りけり。この者ども敵の石山に寄せたるを見ては。思ひくくに近寄て岸の上。蔽の陰より石を取て抛るもあり。棒又は竹鎗。鎌。斧を提て信長勢の路を遮ぎりけるに。固より逃行く道の事なれば。草木皆兵といへる有様ゆへ。愈々隠して此にも伏勢やあるやうにと怯れける故。一揆等はこれ等の落武者の鎧を剝取。鎗長刀を奪取ける程にさしむの武士も漁老農夫の手に懸る事。彼の鯨鮑の蟻蟻に制せらるゝごとく。これ其原因を云へば信長邪見放逸にして佛敵法敵と成りたるより諸佛の冥罰を蒙りたること實に淺猿

信長石
山各々
嚴に

定専坊
上人に
代る

信長退
陣

した次第なり。今日寄手の死傷は數千人の多死に及びしむ石山の戦死は續かに數十人なりしといふ。信長の天王寺に退死。再び敵の寄せ來る事もやあると諸將に命じて備を堅固にし。自若として更に隠する色もなかりしと。大坂にても信長再び寄せ來るかど用心怠りなかりけり。(この時願如上人御出座と稱するも其實は大坂三番定専坊了願。上人に代りしは今同寺に藏する願如上人五月廿八日了願に與へ給ひし書に自刻の祖師木像を付與して護持佛と稱さしむるにて知らるゝのみならず今世及)
七日の早天に信長は長岡兵部大輔藤孝を具して河内若江の城に引取り。これ石山の地利人和免て力を以て争ふこと難死を度り天王寺に。佐久間父子を置死。その餘皆十餘ヶ所を設けて鎖と爲し以てその糧盡るを待たしむ。
この時大坂籠城の信徒多しと雖もその功を建る雜賀第一たりしといふ
全年六月十四日本庄の出城に於て合戦あり主客討死多し
全八月天王寺と勝愛の塔の間に於て合戦あり。敵味方二千餘の死傷あり

信長道を大坂を困む

若山

越前

水谷孫四郎景忠

●城中の困乏、毛利糧食を輸す

天正四年信長已に大坂と力争するの徒勞なるを知り。只此上は糧食の尽るを待ちてこれを攻めんとて大坂の要所に砦を置死。運輸の路を杜絶せしむ。是に於て城中果して糧食乏を告げ。將に窮餓を訴へんとす因て六月顯如上人は下間を使者として竊かに越前へ下し。毛利輝元。吉川元春。小早川隆景に兵糧運輸の事を懇囑す。右の三家には快くこれを承諾し。頓て大坂へ加勢として飯田越中守義言に軍勢を率ゐて籠りしめ。又木津城には粟屋内藏允元宣。花隈城には香川美作守光景。杉次郎右衛門元家等を交代して守りしめ。淡路岩屋城には丹地太郎兵衛。神野加賀守。長屋右近大夫を入れ置かる(六月日下間顯の書面あり下野國船到若岩屋大急に越前條成其心得不移時日有渡海行未談合可被相突事所要被思召候中略此度下野國無差働歸國者其跡之儀一大事必定候云々あり當時木山の深く難攻の二統に依頼ありたるを見るべし)又七百餘艘に兵糧を搭載し警固の水軍三百餘艘を差添ふる。其將士には兒玉内藏允元助粟屋内藏允元宣。香川左衛門廣景。村上八郎左衛門景廣。全三郎兵衛景親。全備前守景盛。水谷孫四郎景忠。財滿新左衛門。賀屋市介。包久庄五郎景勝。生口孫三郎景守。白井經服允

川口

南三河守。末市常陸介景盛。磯兼左近大夫景通。桂上總介。福間彦右衛門。出明彌左衛門。井上又右衛門春忠。遠藤左京亮。田所甚右衛門。嶋越前守。有地民部少輔元盛等七月上旬播州室津に着岸しこの地より先斥候を出して見せけるに。木津川には佐久間大宅三艘を並べたるは宛り城廓の江上に臨めるに似たり。其外大小の軍艦數百艘舳舻相含みて陸兵に連り。水陸の通行を閉塞し。又尼ヶ崎にも軍船多く繋け並べたれば大坂邊には面を向くべし様もなしと飯告ぐこれに依て將士軍議を凝りしけるに先づ射手船を漕向て敵の水戦の様子を窺ひしめてこれが強弱を試みんと。五十艘。三十艘宛毎日漕寄せければ川内よりも同く漕き出で、相戦ふ。然るにこの頃紀州雜賀に在ける鈴木孫市は水軍に功者なれば室津へと馳下る。諸軍これに力を得。率此上は無二無三に敵船を切崩すべしとて先づ軍船を先に立て。兵糧船を後に續かしめ。川口差して漕入れければ。敵方にも伊勢國住人丸鬼右馬允。大和國住人間鍋主馬兵衛。沼野伊賀守。全越後守河内住人杉原兵部丞。宮崎兼太夫。舍弟鹿目助。寺田又右衛門。尼崎の小畑花隈の野口など射手船三百餘艘漕出

村上八郎右衛門

大船三艘を奪ふ

兵狼を石山に納る

し。散々に力戦す。されども中國船には能島。村上を先として浦。兒玉の者ども。何れも水軍に妙を得て數代功勳ありし家なれば。船の懸引自在にして魚龍鳧鷗の如くなるゆへ。敵船動むすればせり立ち。次第く引退て引。爰に大船一艘漕退んとする處を村上八郎右衛門舟を混と押付。船の方にありし一人の兵鐵砲を擡へ。先に進んで船に近かんとする兵士を射倒しける勢に。船三四間隔てたり。八郎右衛門頻に下知して再び漕寄せ。敵船に乘移り。難なくこれを奪ひけり。又浦兵部。井上又右衛門。香川左衛門尉等も敵船に乗り移り。繋ぎ並べたる大安宅三艘は全く味方に屬しければ。遁る敵を追蒐けるに。堪兼て水中へ閃々と飛込みて或は溺れ或は流れ。寺田又右衛門は水を潜りて遁れ。その餘間鍋。野口。小畑。伊賀。杉原等は多く討れける。中國勢はこの隙に搭載し來りし兵狼を。一俵も殘りぞ。城中に運び。顯如上人に面會し。厚く饗應を受けて何れも歸帆を擧げたる中兒玉内藏元は晋の桓温が枕を撫して男兒芳を百世に流さばは奥を萬年に傳へんといへる惡例に倣ひ。高砂の歳ふりし相生の松を伐て船中の薪となせしかば

兒玉高砂の松を斬る

梶掛の奇特

信長雜賀征伐の戦を定む

四社の神靈も怒りましくか。海若俄に荒れ風起り船も覆没せんとする時。顯如上人より贈り給ひたる名號を海中に投せしに佛陀の加護にや波風収り無事に廣島に着した處後に海中一道の光あり。是を見れば先に投せし處の名號梶に掛り給ふを見る。因て之を梶掛の名號と稱し。兒玉家の重寶となりて秘藏するといふ(明治十年十一月九日今の兒玉少介氏(東京築地別院にて開展し毛利家出身の寶願は何れも拜觀ありしといふ)この時毛利氏の厚誼なくば石山本願寺は終に轍鮪枯魚の患を免るゝこと能はざるべし然れども大坂の館城は實に信長西下の志を妨げ。本願寺と毛利氏とは相互に唇齒の關係ありたれば。毛利氏のこれを救ふも亦防禦に外ならずなりしなるべし

○信長の三子、雜賀の一黨を伐つ

石山の役に於て紀州雜賀の一黨は尤も功勞多かりしが。信長のこれを憎む亦殊に甚たし。石山の守堅く援かざるは。雜賀黨のこれを扶持するによるものなれば。先づ本願寺を圍て。雜賀を攻めざるべからざるとて天正五年正月信長京都に入浴ありて妙覺寺に館し雜賀

信長勢
出陣

雑賀備
を修む

信長の
先陣敗
走

征伐の機を定めぬ。時に雑賀の三城并に根來杉の坊など。志を變じて信長の味方に
 参るべし由申ければ。信長大に喜びてこれを嚮導となし。嫡男秋田城介信忠、二男北島
 中将信雄、三男織田上野介神戶信孝を大將として。美濃尾張伊勢近江越前若狹丹
 波但馬播磨及び近畿の勢を催し。二月十五日信長京都を立ち。河内若江迄出張せし
 る。雑賀のものをこれを聞知。和歌の彌勒寺山を要害の地と定めて。防禦の用意を爲しけり
 。雑賀の運命この時にありとて小雑賀の上下。玉津島。布引邊の川中には桶壺等を埋め
 馬足これに陥りて進むこと能はざる様に拵へ居たり。寄手の先陣佐久間左衛門尉信盛
 羽柴筑前守秀吉。その他荒木。別所。堀等を始めとして發向し。三月三日にこれを征伐
 す。雑賀勢は彌勒寺山の南北に陣を張り。弓鉄砲を兩邊の如く隙間なく射出ければ。先
 陣に進みたる堀久太郎一支もせせして敗走し。馬を川中に入れば兼て埋めある桶壺に
 陥り。殊にこの日は満潮なるを以て自由を得ず。川中に躊躇し居る處を時分はよしと差
 詰引詰散々に射立ける故立處に百五十騎餘を討とり寄手大に敗北せしかは雑賀勢は凱歌

雑賀降
を乞

雑賀降
を乞

天正六
年

同七年

を揚げ。これ備前佛力の加はる故なりとて刀劍を以て符の如くし。弓鐵砲を水軍の如く
 舞し。關戸の明神の前にて狂ひ踊りしといふ(紀州徳川家の始祖南龍公毎年四月十七日和歌浦東照權
 吉例ありと傳ふる由あるが十年信長の駕森を攻るや將に陥んとする時信長賦せられたるを以て孫市法難の平くを喜
 ひ足に銃劍のあるをも忘れて狂舞せしかばこれを世に孫市の跛踊といふ或は此事と混するが此に附記して疑を存す)
 されども目に餘る大軍なれば遂に降を乞ふに至れり(紀州専念寺に鈴木孫市、栗村三郎太夫、島木七
 郎太夫、土橋若太夫の七人にて降参を故したるの書ありて。三月十五日信長朱印と記せり。蓋しこの時の事なるべし。
 而して五月二日下關刑部卿頼麻呂の黒口村御門徒退衆中と宛たる書に。今度雑賀表信長被討詰之時。不測家財。不測
 身命。雜賀へ被迎。被抽粉骨之儀。自雜賀以人數出被申候。忠節九報謝之至。御感不斜候。彌向後致三其心懸。毎年可有馳
 走之段。可爲專用之由被仰出候。とあるに依て見るときは信長に降らざるものに似たり諸和の後願如上人跡を駕森
 に迎させ給ふも深く依頼する處ありしや疑ふべし)
 天正六年尼ヶ崎にて數度の戰あり
 全七年三月十日臨津大和田に於て合戦有けるに。戰の半地震すること甚く。人恐れ馬
 驚れて備亂れける故。寄手終に逃走して河水に没溺する者多し。
 又傳法の砦に在ける者。小船を丈夫に作り。端の坊を大將とし打て出けるに。水上自由
 を得。敵の大船を破り。比類なれ勇を顯はす事度々なり。又中島の戰に於て生島權五郎

北村新介。全新大夫等京勢武藤彌平兵衛と戦ひ。大利を得たり。この時石山にて武藤を討取たりと傳ふれども信長方にては病死なりと稱せり蓋し重創を負て歸り後に死したるかその是非を知りぞ

○天裁を奉し上人和平を講ず

元龜元年信長自ら兵を率ゐ大坂石山の城を攻ること數ヶ度に及びしも徒に士卒の命を墜し。國用耗散するのみにて利を得ること能はず。況んやその部下の將をしてこれを攻しむるに於てをや。是を以て五年より七年迄佐久間父子を天王寺の砦に込め置死。機會を見てこれを亡さんと欲す。佐久間父子屢々夜討を掛くる時は御眞影汗を流し給ふことあり。因てその寇あるを察し。これが備を爲し。却て敵を敗ることあり。又城中に間者を入れ内より火を擧てこれに應せしめんとする事あれば御眞影に備ある佛飯自ら二つに裂くることあり因て城中を搜索すれば。果して間者を生捕る。又敵寄せ來りて味方利を失は

御眞影の奇特

黒衣の僧敵陣に突入す

信長和議を欲す

朝廷に奏請す

んとする時は黒衣の僧敵陣に現はるゝとあり。因て敵軍中眞宗皈依の徒に在て却て書を本願寺に致して云く。黒衣の僧あり。勅めすれば敵陣に突入する。定めて御一門たるへし。甚だ危険なれば後陣に控へらるへしと。その奇異一にして足らざりしといふ。是に於て信長以爲らく大坂の地守るに便にして攻るに害あり。況んや信心堅固のもの。命を捨てゝこれを防くあり。到底力を以て争はんこと愚の至りなり如かぞ謀略を以て和議し徐ろに本意を達せんにはと(或は傳ふこの時信長天主教の弘化を許したることを悔ひ。且つ七年五月安土に於て自巡宗袖日光。浄土宗密教と宗論あり。日光勝つこと能はず。僧衣を脱てこれと違ふ。初信長の臣。大脇傳助。建部紹智。日蓮宗を崇信し。浄土宗を惡むと甚し。因て信長に請てこの宗論を聞く。信長その事を生ずるを惡み二人を除す。これより信長大に曾志を變したることありといふ)是に於て七年某月信長傳奏に就て奏して云く。信長夙に勘王の讖を唱へ。王化を四隅に及さんと欲し。石山本願寺の地は要害の名地なるを以て之に一城を築死西國不廷の臣を討せんとし。これを本願寺に請はしむるも。彼れ命に應せぞ。因て彼と干戈相争ふ今に於て年あり。この事已に叔聞に達することありん。然るハ叔慮を彼門跡に加へられ。信長の下知に従ふべし由勅諭をも成し下さるべしに。今にその事なれば天氣も彼の門跡に荷擔遊ば

勅使大
阪に下

さるゝかと疑ひ奉る所に候。左ありんには信長亦朝家を恨み奉るべしと。言頗る荒かに
 奏問ありければ。大に愾慮を惱させられけり。因て廷議の上庭田大納言源重保卿。勅
 使寺中納言藤原時豐卿を勅使として差下され。近衛龍山公前關白前久には願如上人と御
 懇親の間柄なればこれ亦御下向ありけり。勅使より仰下さるゝ様は。本願寺は専修念佛
 棟梁の身として法化を四海に弘通せらるべしに。只大坂一彈丸の土地の故を以て武門と
 雌雄を争ひ。天下の士民を苦めんこと甚だ然るべかりせ。早く信長と和議を講じらるべ
 とありければ。上人謹んで御返答なりける様は。年來信長と宿意あるにありせ。又尺寸
 の土地を争ふにもありせ。只信長暴威を以て寺地を掠奪し且つ法流を斷絶せられんとす
 るを以て止むを得せ之を防禦するの謀を回す。されども未だ此方より他所に軍を出
 し弓箭を以て人を惱したることなし。此上は信長だに我に向て怨讎を含ませ宗門相續の
 儀に於て異變さへなくば。勅裁に任せ奉るべし然し乍ら兼て粉骨碎身せる一味同心の者
 も有之候へば申聞せ。是より勅答し奉るべしとの御返事に勅使は御飯浴あり。(常春寺
 記に依る)

願如上
人の勅

石山評
定

願廉仲
之議を
獻せ

に天正七年十一月三日常樂寺証賢願証寺証顯淳。教行寺證賢慈敬寺証智四人の連署を以て雜賀年寄
 を呼寄せらる。因て時日を移さず上着ありとこれを以て見る時は勅使の下向は七年十一月頃なるべし
 以て願如上人教如上人御出座ありて御評議あり。其席に列るは下間仲之。全願廉。全
 龍願。常樂寺。願証寺。教行寺。慈敬寺其外一門外様の將士譜代恩願の面々なり。種々の評
 議ありけるが。下間刑部部頼廉。全少進法印仲之進出で云く。目今東西に勇武の諸侯多
 くと雖も。一度び信長に敵對たるものは城を陥られ降を乞ひ。その國を滅亡せらるゝに
 至る。然るに常寺の如くは。地利堅固なりと雖も纒かに一重に過ぎせ數年彼の強敵を
 引受け戰爭に及ぶと雖も。彼れ却て敗績を取るもの多きは是れ全く如來祖師威神力加被
 の致す處なりと雖も又紀州一揆の身命を抛つての致す處なり。然るに紀州にして越前。伊
 勢の如く敗滅に飯せんか。將來の事謀るべかりせ。(是)一凡を攻戰は敵の地を取りては
 所領を將士に與ふ。今當寺の戰を爲すものは只佛恩報謝の爲なれば。上人御一言の御威
 賞は千貫よりも尊く存じ少も恨みなりざるも國々の信徒信長の爲め殺害せらるゝことあ
 るは深く當寺を憎むが故なり。若し和議ありんには全國の門葉この憂を免るべし(是)二

又實如上人。証如上人相繼で帝室を奉戴し給ふこと篤し。今や信長勅裁を請ふに至り
已に繪命に及ぶと死はこれに對して異變あるべし(是二)只此上 應る處は信長表
裏第一の大將にて候間奏聞を経て後日當宗の弘通に於て障害を爲さざること上人に對し
殺害の心を狭さる旨を誓紙として取替し給ふに於ては異議を存すべかりき。已に蓮如上
人この靈場を御草創ありしも「コノ在所ニ居住セシムル根元ハ。一生涯ヲ心ヤスクスコ
シ。榮花榮耀ヲコノミ。又花鳥風月ニモ心ヲ寄セズ。アハレ無上菩提ノタメニ信心決定
ノ行者モ繁昌セシ。念佛ヲ申サン聲モ出來セシムルヤウニモアレカシト思フ一念ノコ
ノロザシチ運フバカリナリ。又イサ、カモ世間ノ人ナンドモ偏執ノ族モアリ。ムツカシ
キ題目ナンドモ出來アラントキハ。速ニコノ在所ニ於テ執心ノコ、ロチ止テ退出スベキ
モノナリ」と宣へはこの遺戒と勅命に任せ給ふへ死なりと言を盡されければ。並居る人
々もみなこれに同じける。因て信長に宗門の流布に障害を成さず。又門跡に向て仇怨の
志な死旨の誓書を仰付られ。信長領掌あるに於ては重て勅宣を被成下候は、勅裁に任

勅使再
大坂向
下にあり

盟書を
交換す

せ奉るべし死旨を勅聞に達し給ひければ。此旨信長にも勅諭あり。(此時朝廷より、顯如上人に賜
らる其文云今度は和談の事無別條と、のへり。前右府馳走のよし、佛法繁昌の基と珍重候。つきては。どてももの事に大坂
退城候は、万端可然候はんよし。内々報慮よりも仰せ出され候。猶くはしき事は源大納言。勅修寺大納言可申候也かし
くきこれによれば先初に和成るを賀し。次に諭して城を出)二月十七日兩勅使再大坂に御下向あり。
さしむ。蓋し講和と退城と兩度にこれを議するもの、如し) 二月十七日兩勅使再大坂に御下向あり。
信長の盟書を顯如上人へ渡し給ふ。此時信長よりも使を以て勅命に依て和睦致し候上
は全く野心なくその趣は盟文に筆する處なり然ども上人の疑心を晴さん爲め人質を大坂
に差下さる。因て上人よりも盟書を書かじめ血剣せしめり(これより先き閏三月三日信長より
はさる。用紙は杉原二枚裏面の繼目には井上) 尚上人御父子にも別紙壹通を進上せり
出雲入道捺印し執筆は川那邊周防守ありしと)

敬 白

起 請 文 覺 書

一 今度爲 叙慮被 仰出。御赦免之上者以條敷申合。首尾萬事聊表裏拔公事不可致事
一 給置御人質大坂に置申。中國并雜賀。其外何方へも遣問敷候。但退城之刻無氣遣所
迄同道申可返申事

一雜賀之者共。御門跡次第に可致覺悟之由誓書可申付事。

附大坂雜賀之人質。中國其外何れへも不可遣事。

一退城約月。七月可爲益前事。

一大坂退城之刻。花隈。尼崎。河分口出城必明渡可申事。

右之旨趣者今度從。禁裏被。仰出付而當寺御赦免之上者右五ヶ條之通不可有相違之誓

詞。門跡被申付候間。條數而聊表裡拔公事別心不可仕候。若此旨於僞申者。梵天帝釋四

大天王。惣而日本六十餘州大小之神祇。別而西方善逝阿彌陀如來。殊當寺開山蒙御罰。

今生者白癩黑癩與罷成。來世者可墮在無間者也仍誓詞如件也。

天正八年閏三月五日

下間少進法橋仲之 血判

下間按察使法橋賴龍 血判

下間刑部卿法眼賴廉 血判

庭田 殿

勸修寺 殿

今度爲。叙慮被。仰出。當寺被成。御赦免候に付而。以五ヶ條申定。年寄三人に申付

誓紙。致進上候上者。毛頭不可有相違候。然者不可存表裏拔公事別心候。尤直以誓紙

可申上候得共。寺法之義に御座候而。如此候。若右之趣於致違變者。兩三人誓紙之尉。

同前可蒙候。此旨可有奏達候。

天正八年後三月五日

教如光 壽判

顯如光 佐判

庭田大納言 殿

勸修寺中納言 殿

斯て顯如上人は勅定に任せ。又信長と盟約の旨を違へせ。全四月九日祖師御眞影を奉

顯如上
城人御退

藤森御
安着

じて本願寺を立出給ふ。相隨ふ人々には常樂寺。御堂衆願入寺。光榮寺。西光寺等にて。雜賀の孫市。根來の小密茶。源次大夫等一騎當千の兵五十騎餘御輿を護衛す。境口の門を御通ありて木津より乗船し給ひしに海路穩に順風なりければ。翌十日紀州鷲の森へ入りせり。此所は雜賀孫市の領地なりければ殊に無二の懸志を勵せしといふ

●信徒の過慮、再び大坂の守備を修む

徒者效
如上人
を勸む

顯如上人には已に紀州鷲森に遷り給ひ。教如上人を留め。約の如く七月を以て城を信長に致さしめんとす。時に速雄の者をも教如上人に勸めけるは。今度信長との和平の儀は何にを恐怖し給ふての御事か。十一ヶ年の間毎度彼を追崩して味方大利を得。只敗軍せしは二回に過ぎき。これ全く佛祖の御冥慮を加へらるゝものなり且つ信長の反務謀り難し。今暫は盟書の面に對して別意なかるべからざる當城を出で給はゞ遂に彼の謀客に陥り給はんことは現に目撃するが如し。此上は唯城に要て固く守り給ふべしと説き勸めけれ

信長再
び本願
寺を攻

諸處の
岩敗る
顯如上
人放如
上子と
絶し給

ば教如上人未だ御若齡に在し候故。これを信じ給ひて再び守備を修め給ひける。顯如上人遂にこれを聞給ひて御書を送りて留め給ひけれども。これを用る給はき。然るに信長これを聞て大に怒り。和議の事は已に勅裁を経。且盟書を取換したる上かろは早速城を明渡すべし等なるに。却て守備を修めて再び吾に敵對せんとは奇怪の至りなり。率それなりば一揆に攻破らんとて池田庄三郎父子に二万餘騎の勢を授け。大坂に發向せしめ七月二日に兵庫并に花隈の城を攻落し。大坂船手の岩。辻安田も同月十三日に落城し。始め教如上人を勸めたるものは逸早く跡を遁れける故。今は城を守るべし様もなく因て城受取の奉行矢部善七郎へ種々御内談ありける。七月廿八日御堂を善七郎に渡され。八月二日の夜を以て竊かに遁れ出給へども。備前より上は悉く敵國なり。紀州のみ味方の國なれば彼國へ落行。和歌浦へ立寄給ふ。顯如上人此由を聞給ひ。吾れ新門を不孝とする事私の意趣にありき。勅命を背死。信長との盟約を破て城を抱へんとする事。佛神の照覽を不願の致し方なり。又吾れ盟約の通り和平の旨を守ると雖も。新門盟約を

破りたる上は。必定信長より討手を向られ。宗門破滅に及ぶべし時至れり。彌陀釋迦二尊の御代官として衆生に信心をすゝむる身の不義不信心に陥るは實に悲歎の至なりとて。その違勅の罪を責め給ひ。奏問を経て父子義絶し給ひしは。父は義の爲め。子は宗門の爲めとは申乍ら實に御憐れなる事なりけり。

●佛陁の冥護、鷲森攻伐を免る

信長石山本願寺と講和の後天正九年八月兵を遣して高野山を攻め。火を縱ちて之を焚死。悉く其寺内を没取し。十年武田勝頼を討じ。關東を平定し。澗川左近將監一益を以て關東の管領と爲し。秀吉を遣はして毛利輝元を攻め。將に天下を吞併せんとす。然るに本願寺に對して恨を含くこと深し。天正十年五月某日竊に家臣を集めて詮議ありけるは。本願寺顯如表裏の心を懷死。自身は大坂を退城し。尙敷如を跡に殘して籠城せしむ。これ管に信長を欺くのみにあらず。勅命を蔑如するものなり。斯る惡逆の僧をその儘に

信長竊に鷲森を襲ふを定む

信孝發向

門徒變を鷲森に報す

措くならずば。遂には天下の太平をも亂るべし。急ぎ顯如父子を誅戮して且は數年の鬱憤をも散せべし。されども表面渠を追討すと稱せば。諸國の門徒又重て蜂起し騷亂の端となるべし。幸に四國の長曾我部を征伐するの機會を以てこれに假托して三七を大將となし。泉州へ發向せしめ。不意に紀州に押入るべしとて五月十一日壹萬餘騎を率ゐ。四國追討と披辭して京都を出立ありて岸和田に本陣を据りければ諸軍士は濱の手ど。山口越と兩隊に分れて屯を張る。人これを見て。この心得ぬ陳取かな。四國渡海ならずば。海邊にのみこそ陳取るべしに。山口の方に向て陳取することは。或は今紀州に在す顯如上人を攻め奉らんとの結構にやと。近郷にある御門徒の。この有様を見て。こは捨置くべしにありきとて。この旨を鷲森へ注進するもの引も切りせ。上人はこの由を聞給ひ。鷲森より和歌山に遷り。紀の關守に下知して小野山の峠に荒垣を結ひ。弩を張り。其外紀州の山々より蒲嶋に至る迄。人を居死て往來を守りせ給ふこの事隣境に聞へければ。門徒の僧俗雲の如く聚り。星の如く羅り。寄せ來る敵を待受たり。されば六月三日の拂

防守

寄手退

信長弒

敵の狂
喜す

曉に寄手の先鋒至り関を作て押寄たり。御門徒の面々は今度こそ隔々討死をし如來上人の御恩報謝の爲めには骨を碎死身を裂ども。惜むべ死にありとて。鐵砲を擲へて討懸けるに寄手は楯も矢來も打壞かれて颯と數十町を退死たり。此方は各一息繼て再び敵の寄せ來るを待けるに。巳の刻斗りに寄手は陣を拂ふて引退くゆへ。味方は案に相違して。斯程の猛勢寄せ乍ら何の故か。敵には極めて深死謀計にてもある事にやと更に後を慕はざりけるが。後に聞けば昨日の朝京都本能寺に於て信長逆臣光秀の爲めに弒せられし

の注進ありしに由てなり。(相傳ふ信長の兵已に覺蘇に迫る宗主狼狽す所を知らず、將に火を縱ちて自ら祖像と共に焚死せんとす、個信長弒せらる、に逢ひ幸にして免ると大谷路討亦此説あり慶應寺支智云く本山信長の志を察すること審かあり、其黨蘇に移るや深く慮る所ありてあり、況や蘇の驍勇たる天文已來腰々本山を警衛して功あり天正十二年春岸和田の役、豊臣氏をして和を乞はしむ、蘇の兵未だ衰へず、豈その自滅を傍觀して止むべんや、縱ひ不幸にして收る、も祖像を灰燼に付する) この時味方は天にも昇る心地してやれ難有や、忝や。もと一日後れなば遂に敵の爲め上人危殆に及ばせ給ふべし

此逆縁却て味方の幸となるとは全く信長の神社佛閣を破却せられしこと佛神の冥慮に叶はせして手を光秀に借り給ひしにありとやと人々喜び勇みしとは實に有理なる次第

上人父
子和融
す復

なり。是に於て教如上人累りに宿僧を怨されんことを請ひ給ひ。御母如春院にも只管少詫び給ひければ遂にこの旨奏聞を遂げ。勅諭に依て再び御父子和融し給ひける。その後泉州貝塚并に大坂天満に移居し給ひ天正十九年京都六條堀川に両御堂を營建ありて第三子准如上人法統を繼がせりれ其後慶長七年に至り教如上人には徳川家康公の外護にて一字を創め給ひ法燈并び輝て三百年の今日に至り御繁昌彌増こと開祖見真中興惠燈兩大師の御遺徳に依るとは云へ亦上人の盛徳鴻業によると思へば深く渴望欽仰し奉るべし

結論

石山本願寺の信長と兵を擲るの止むを得ざるに出来ることは先に叙するが如し。然して世間佛敎を忌避する腐儒の記したるもの實を傳ふること少し今一二例を記せば青山延干は大坂の信長と兵端を開くは信長の本願寺に科役錢を出さしめたるを怨みて三好と通じ事を擧ぐと又松苗は元龜元年初度の戦に信長大に石山勢を敗ると。又天正三年十月本願

世間の
歴史事
實を誤

稗史小説
固より
實なる

陰徳太
平記尤
も精確
なり

寺より信長に平を請しかば信長その俄に難死を知りてこれを許すと是等の類一々指
摘するに違ありき彼の中井積善の逸史の如死に至ては殆んどこれを草寇亂賊に比す。吾
宗門の徒にしてこれを一讀すると死は。自ら覺へて此決し髪立ちて彼の腐儒が筆墨を弄
するの不敬遜色な死を怒りせんばありき。而して一方にて世間稗史小説の傳ふる處に至
ては。亦其浮誇虚大を以て潤飾す。故にこの眞宗に於ける一大外難の事信を措くに足る
ものなし。獨り周防吉川家の宿儒香川正矩の記する陰徳太平記中本願寺の事を記する尤
も詳確なりとす。正矩の曾祖父光景の天文永祿の間に於ける。祖父春繼父家景の天正永祿
慶長の間に於ける。皆その戦功を軍馬馳騁の間に立つ。因て正矩その家に傳ふる處と。
當時の家乗日記等によりて編輯したるものなれば。その實録たるや疑ふべかりき。曾て
近江の若英師その石山に關係するの事を摘録してこれを石山禦寇記と名けられしと聞く
然るに正矩の記する處前後錯綜したると年月の詳かなりざるあり。因てこれを他の諸
書に参照するに彼此瞭然たり。而して余の今回俄にこれを編輯するの志を誘起せし

編纂の
微意

家康一
小寺を
移すを
憚る

信長巨
多の寺
院を焚
毀す

門末齋
病を包
みて再
建の工
事を爲
す

の原因は前記の事と或る他の事情より今年宗主の遠忌に際し。その浮誇實な死の脱は愈
々人心に蒸染し。遂に耳聞口説に上り。宗主の偉徳をして世に泯没せんことを恐れて倉
皇の際これを印刷に附するに至れり。而して予の尙ほこゝに附記して讀者の注意を乞ふ
ことあり。徳川家康公の兎裘を駿府に營するや。用水不自由なるを以て侍臣公に稟して
云く。一の小寺院ありこれを他に遷移せしめば。水を得ること自由なると。公之を聞
て云く。古來より建築しある寺院を予が庭園を掃ふる爲めこれを移すこと不可なりと。
是に於てその事寢むと。而して信長の爲。前後佛門の災に係るもの叡山。高野。甲斐
の慧林寺。越前の豊原寺等。其他枚擧に違ありざるなり。嗚呼徳川公の勃焉として興り。
織田氏の倏忽として亡ぶるもの。實に偶然にありざるなり。而して我が眞宗信徒の熱心
なる。その外寇を防禦して十一年の長を保持するのみなりき。これに繼ぐに本山營建の
工事を以てし。門末其瘡痍を包みてこれが工事を助け。これが財貨を致し。遂に輪奐結
構の美を帝都に擅にするに至ては。當時信徒祖先の教法が爲めに力を盡したるの功勞

家康本願寺の勢力に驚く

豊太閤その子本願寺の主となすことを望む

を追憶せざんばありき。聞く慶長十六年三月宗祖大師の三百五十回を修するの後。四月廿二、廿三の両日を以て猿樂を興行し。親王攝政月卿雲客これに臨む。時に將軍家康亦これに臨み。その盛大なるを見。侍臣に語て云く。和漢の間この威力を有するの本山は他にあるべかりき。これ宗祖の行化全く朝恩を重じ。國恩を尊び。門下の信徒を撫育して。能く世に應じ。機に逗したるを以てなり。曾て伏見の挑山にありて。豊大閤子に語て云く。予二子ありば。一人は天下の主と爲し。一人は本願寺の相續たらしめんとありしが。太閤の羨望ありし亦宜なるかなとありしを下間三位法印これを面り聞しと云ふ。嗚呼この偉大の勢力ありしめたるものは。即ち宗徒の法を信せること厚く。本山を崇敬するの深死に因てなり。今日の信徒果して昔日の如く篤信なるか。其本山を崇敬するの心亦祖先に譲りざるか今日無形の外寇吾法城を圍繞して。吾法門の勢力を折かんとする當に信長十萬の大敵に止りき。之を防禦して法城を嚴護し能く偉大の勢力あることを社會に認知せしめ得るは今日信徒の責任なり。信徒果してこの重擔を荷負するや否

蓮如上人寛正六年の難

双知の勤

文明七年吉崎の難

本向坊了顯の勤

●法難錄

(古來眞宗にて業りし外) 惡法難の事を集記す

○第八代蓮如上人の世寛正六年。叡山の兇僧眞宗道化の盛大を嫉み大谷の殿堂を破壊す越前の願知祖塙を守護して恙なれことを得たり。相傳ふ上人この時灰小屋に忍び給ひ纒かに難を遁れ祖像を奉じ寇を大津に避く。已にして和を講せ。叡山の徒其志利を貪るに在るを以て貨賄を興へ。且掠奪せしるゝ處の法寶を贖ふ。文明八年願知の舊功を録し感狀を賜ひ。副るに佛像を以てす
○文明七年越前吉崎の坊舎兵火に罹る。事匆卒の際に出で。本向坊了顯自ら腹を刎て祖書を藏め。これを全ふすることを得たり即ち本典第四証卷なり。世に之を腹籠の聖教と稱す。これより先死上人北國を巡化し給ふ。諸民の化に靡くこと宛も草の風に偃するが如し。時に信徒高田と本願寺と法流の嫡庶を争ふ。終に政親に訴へてこれが決斷を乞ふ。政親高田を以て嫡流とす(政親の女高田専修寺眞慧法主)是に於て宗徒憤を發して政親を襲はん

蓮宗の野心

富樫政親吉崎を焚く

通鑑提要の妄

とす。門下の中これを思ふるものあり来てこれを上人に訴へ。その禁止を請はんとす。時に下間蓮宗(安藝の法眼と稱す越前淺木の八)政親と宿恨あり。これを機として亡さんとす。上人の前に至り陽て云く。加賀の御門徒富樫を亡さんと欲す。因て御本寺より大將を下されんことを乞ふ。上人云く。それは何とも合點參りざる事なり。門下の來れるものに委細を聞かんと。蓮宗その事の敗れんことを恐れて右の門下に謂て云く。之を上人に告げしに大將壹人を下すべし。間早く合戦の用意を爲すべし。門下の者惘然として爲す處を知り老。是時蓮宗。超勝寺を語らふ。富樫政親これを聞て怒り。不意に越前吉崎に押寄す上人始めて安藝の所行なるを知り。之を誣責し給ふ(きりきざりても飽ぬと仰せら)上人八月廿一日の夕彌かに若州に遁れ給ふ。

因みに記す林恕氏の通鑑提要文明十七年の下に一向宗門兼壽分三遺於其徒於諸國。誘民惑衆。信附阿順樹黨蜂起すとあり。これ中祖の化風を知らざるより或は前の事を誤り記せしものか。局外者の手に成る歴史にして佛敎上に關する事に就ては往々如此とぞあり

富樫政親亡ぶ

加州本山の領となり

文正三年の戦

全四年

り注意せざるべかりき。

○長亨二年九月加越の宗徒富樫政親を高尾の城に攻む。文明六年より此に至る迄十四年九月九日政親自殺し。加州全く宗徒の領となる。本山北地の多事なるこれより始る。

○第九代實如宗主の世永正三年六月加賀門徒群起して越中に寇す國士游佐。神保。土肥。椎名戰破れて越後に至り。援を長尾能景に求む。門徒尋て能登を犯す。國主高山義隆これを避けて江州餘吾浦に漂ふ是に至て加能越三國全く本願寺に屬す。將に越前に入らんとす。八月六日偶一身田より勢尾。參の諸末寺檀徒を語らひ。桑子妙源寺を大將とし越前へ發向す。是に於て九頭龍河邊に於て合戦す。此時門徒方大將昭賢討死す。國主朝倉貞景一乘城にあり。朝倉宗滴入道敎景。朝倉景職。山崎祖桂を遣はしてこれを援けしめたるを以て。餘衆みな加賀へ逃る。是に於て朝倉家領内にある吉崎。和田。藤島の諸寺を滅す北國宗門の退轉は多くこれより起る十月浪徒本覺寺。超勝寺と結托して豊原寺を取らんとす。朝倉貞景これを援ひ。敗れて加賀に走る。四年六月京都細川澄元其父政

十五年

享祿元年

實宗主五子に遺命す

元を弑す。都下騷擾。宗主難を避け。祖像を奉じて江州堅田に遁る。圓如尊師。下間賴玄隨ふ。八月本覺寺。超勝寺等越前に還りんと請ふ。本山これを聽さず。加州人石川玄任本超兩寺と蜂起し。重て越前を攻め。帝釋堂口に進む。守護朝倉貞景擊て之を敗る。一揆敗走し。超勝寺先逃れ。玄任戰死す。この時天下大亂。英雄競ひ起り。僞僞にして軍事に習ひ。攻戰を事とす。北越の石動。平泉。豊原みな然り時勢の然らしむる所獨り宗門の徒のみにありざれば深く咎むべしにありき。十五年北地の宗徒制に従はざるにより國中騷然たるを以て累りに嫉忌を招く。因て堅く攻守、偏黨、連租の三件を禁む。

○第十代証如宗主の世享祿元年實英。先宗主の遺命に違ひ法制を守らば。加州領の事を議す。又越前太田保を領し神保。推名の地を略せんとす。越前超勝寺實顯亦世亂に乗じ。攻戰を以て志となし。屢々大兵を率ゐて侵襲す。これより先死實宗主の寂せんとす。宗主年僅に十歳。是を以て。實圓。蓮淳。蓮悟。蓮慶。顯誓の五子に後事を托して云く。我沒後眞俗を問はば。五子相謀りて法制を守るべし。後ち或は法制を廢するの徒

三條の遺囑

下間兄弟の大志

ありん。諸子宜く法嗣を輔佐し。馬蹄をして靈場印せしむること勿れど。又實英に命じて云く。後事五子に囑す。眞俗共に法を守り諸國をして安靜なりしめ。加越亦和を講せべし。尙親屬諸徒に囑するに三事を以てす。一に諸兵家と戰爭するを停止し。二に采邑を侵襲して寺領と爲す事を禁む。三に國制を守り。佛法を荷ふ事を以てす。亦圓如尊師御臨終の際實如上人に啓し給ひて云く。一流の義を破滅せしむべしは超勝寺實顯なり。故に實宗主御在世の間は何事もなかりしが。是に及んで其言驗あり。而して下間賴玄の子筑前法橋賴秀。其弟民部少輔賴盛大志あり相議して云く。方今天下大に亂る。宜く諸國門徒に勸め。悉く武士を滅し。我宗主をして將軍と爲し。我輩その管領たるべしと

(通鑑提要并に加越關評記) 享祿二年の春加州に降り。大坊主分。門下の宿老を招り。宗主の命を矯め大軍を催ふし。北國を侵襲す。時に願命の五子力を合せて規諫すれども抑止することを得ず。加州の宿老亦諫を本山に上ると雖も言路梗塞して通ざるに由なしこの時宗主は幼く詔設の徒時を得たり三坊主。四部長。河合。洲崎等下間兄弟及び本超兩寺に違ふ

兄弟牆に闘く

天文元年
日蓮
徒山科
を焼く

を怒りて。即日波佐谷を攻め。殿宇を焼死。又若松を焚攻す。以來一門の中兩黨に分かる。八月本超兩寺兵を率ゐて山田寺を攻む。山田寺圓鏡援を朝倉孝景に請ふ。十月孝景宗滴入道教景をしてこれを援ふ。是時實頼の弟超玄戦死す。而して獨り兄弟牆に闘くのみならず。これより北國の守護と互に相攻伐して息むとなし十一月十八日蓮慶及其子實慶。慶助。下間頼宣弟頼康頼繼等自殺す。本泉寺實教。勝興寺實玄壽に中て死す。實宗主遺命の懇囑も遂に水泡に飯したるは姦臣世を專らにしたるの故なるべし。

○天文元年八月廿四日紀州六角定頼京師の日蓮黨と共に山科本願寺を攻む。事倉皇に出で。これを防ぐこと能はざ。殿宇を一炬に付し。証宗主祖像を奉じ。下間頼慶護衛す。願行寺勝忍。下間祐慶。及頼益奮戰敵を禦死て死す。これより先死五月畠山義宣木澤長政を攻る。長政兵を細川晴元に請ふ。晴元兵寡し。救を本願寺に乞ふ。この時証宗主なは弱死て以て下間頼秀。弟頼盛等權を專にし。將軍義晴の御供衆まで召加へられ。晴元と結托して益權を專にせんと欲し。法主の命を矯て近國の門徒を召す集るもの凡

下間役を誘ふ

攝州野田の宗徒討死

と三萬人。全十五日に飯盛の城を攻め三好の勢を敗る。七月晴元下間兄弟と相好し。八月下間の黨晴元の館を攻む。時に六角定頼之を聞て日蓮宗徒と本願寺を攻めてこの難あり。六角定頼日蓮宗飯依の信徒にて所々の寺々へ財寶を寄附し若し佐々木勢事ありんと死は加勢すべ死の約あり。この時日蓮宗徒大に吾眞宗を妬み遂に是に至ると或は云ふこの役下間源十郎。下間筑前兄弟と權を争ひ終に外寇を誘へりとの時証宗主十七歳祖像を奉じて大坂石山本願寺に移り。江州の宗徒定頼の山科に寇するを怒りて六角家諸士の家を焚てこれを報せ翌年五月細川六郎澄元日蓮宗徒及び諸家の兵を誘ひ。天王寺に屯して大坂を攻むること數月遂に克つこと能はざ。この時三好木澤の仲裁を以て和議成りて寇退く。或は云く。二年八月九日攝州野田の宗徒廿壹人敵を防で戦死す。宗主書を賜ふてこれを吊す (今日のがづせんに廿一人うちじのよし。いたはし。せひに折よばず候し。かれども聖人候はざる事うたがひなく候。いよいよ馳走たのみ入候。此討死のあとへ) 又大坂の北邊。川口。柴崎等の諸村多く宗徒なり。中に於て宗主大坂別院に於て祖忌を修る毎に。特に召して齋食を賜

ふめの五十三人。今に至りて渝々。これ大坂寇を禦ぐの日戦死者の裔なりと。その祖先の忠死を嘉みんじ永くこれを賜ふ。この時必紀州雜貨の宗徒特に勳勞ありしと。而して興正寺蓮秀亦和を講ずるに力あり。初て一家の列に入るを許す(興正寺は蓮如上人の時佛光寺經順如師を介して四十二坊を率めて來皈す。因て名を蓮教と賜ふ。後寺を山科に營す。地を竹中莊と稱し。寺名を興正と復す。蓮秀に至て一家の列に入り。遂に顯如上人の二子顯學を養ふて嗣とす。永祿十二年顯尊六歳の時勅して臨門跡とす。興正寺の今日也。)

三河の難

○第十一代顯如宗主の世永祿五年九月三河佐々木上宮寺。針崎の勝鬘寺。野寺の本証寺。土呂の本宗寺。徳川家と戦ふ。始め徳川家の臣菅沼定顯。上宮寺に入て米穀を奪ひ兵糧と爲す。寺主諸寺と會議し。檀徒を率ゐて菅沼氏の館に至り。家人を捶撃して囊に奪ふ所の米を取りて歸る。定顯これを酒井正親に訴ふ。正親使を上宮寺に遣はしてその罪を責む。上宮寺使を斬る。こゝに於て政親家康に告ぐ。公乃ち政親をしてこれを糾さしむ。その處置偏倚せるを以て宗徒衆を集め。寺に據て城と爲し。岡崎の兵と戦ふ。然して徳川家の臣本多正信。渡邊氏細等淳く眞宗を奉むるを以て來援ふもの二百餘人。又酒井忠

菅沼上宮寺の米を奪ふ

徳川氏と徳川氏

尙。吉良義昭。荒川甲斐守。松平定次。及今川殘黨これに加はり。其勢大に振ひ諸處に攻戦す。七年秋三河の宗徒徳川家康と和を講じ兵を熄む。寺門の安途故の如し。後徳川氏天下を掌握するに及び。諸侯の眞宗門徒に隸することを禁せしは深くこの役に懲るゝ所ありといふ(家康の東西を証分せし)

○北越の平定 享祿二年宗徒加賀の富樫政親を亡し。次で永正三年に能越二國を傾せしより証宗主の時に及び北國漸く多事なることは先に叙するが如しこれ反故裏書に公武い犯せをりふかくありければ諸國勾劇におよびといふものは是なり。この時下間上野法眼頼慶全丹後法橋心勝等公忠。才あり善宗主を輔翼し。守護地頭の眞宗に皈するもの。日に多く僻遠の地加るに俗縁を以て弘化を謀り。法門次第に繁盛に趣くも北地の騷擾は止ざるを以て証宗主講和を謀り。曾て顯誓(反故裏書)をしてこの事に従はしむ。因て顯誓之を越前の朝倉教景に謀る(即ち宗簡)。教景の父敏景は深く蓮宗主に皈し。その道化を外護せしことあり。因て大に便宜を得。互に和平を約する所あり。然るに証宗主偶々病を以て

北國宗徒の騷

証宗主講和を謀る

再興院
を以て
しめん
とす

宗徒
攻伐を
事とす

寂す慶壽院(西如上人の藤中。大永元年八月癸酉時に年廿九、法名融誓)衆の危懼を生せんことを恐れ
重て顯誓をして書を教景に贈り。舊盟を續がんことを告げしむ。時に加州の徒定地坊勝
祐(後實勝と改)難を生ぜ。事未だ諧べかりざるを以てす。その言の如く和議果して敗るこ
の時下間頼慶。光頼の如死既に死し。興正寺蓮秀。教行寺實誓。弟賢勝。本善寺實好。
本宗寺實圓等の諸公前後に歿し。これを匡正するものな死を以て北地昭々を亂る。無頼
の宗徒兵を能登に遣はし。又越中を領せんと欲し。甲州長延寺實了(實了武田信玄の爲に)武
田晴信能登鳥山四郎義則に通じ。其後温井の兵を分ち。これを加州に移し。又越後を侵
略せんとし。北條氏康に應せ。謀議縦横。これによりて長尾景虎。能州義繼に告げ。又
朝倉義景に約し。教景已に兵を加州に出し兩國驟然たり(天文十一年越後長尾景虎越中の宗徒を討
景を欺て云く。我輩麾下に属し。公を導て加賀國に入れしめんと。爲景これを信じて行く。人馬陷りて死し。爲景亦死す
るに至るその驢梁思ふべし次で天文廿一年七月朝倉教景其宗徒景に誦ひ。加賀の一揆を討す。八月諸國眞宗の檀徒等加
賀の亂を聞き。その信徒を率めて。來聚る者數萬人。報勝寺某大將とある。時に教景病に罹る)これ超勝寺顯慧(實
を以て同族飛騨を兼知山に遣はし。教景に代りて諸兵を指揮せしむ蓋しこの時の事からん)これ超勝寺顯慧(實
子)偽謀を設るに由て起れり。然るに下間駿河法橋頼言加州に趣死。之を大崎晴光に謀り

北國平
定す

て和を講せ。顯慧潜かに奇策を運りし。頼言を鳩殺す。弘治二年春頼言の弟左近將監頼
長重て加州に趣死兩國の爭亂を和解し。是に由て朝倉景隆兵を引て越前に飯り。加賀集
帥窪田氏越前に到り。朝倉義景に關す。和議遂に成る顯慧罪を懼れて跡を越前に晦し。
尙宿志を行はんとせしむ故ありて命を殞す是に於て北越平定す。次に大坂石山の役起る
其詳細は本編の記する處の如し

引用書目

蓮如上人遺徳記	反故裏書	法要典據	大谷畧譜
本願寺通紀	山科實錄	鷲森舊事記	大谷氏系譜(大谷派本)
本願寺由緒通鑑	表裏問答	更鳴集	皇年代曆記
本朝通鑑提要	帝王五代物語	聖代老の手鼓	逸史
續皇朝史略	國史畧	陰徳太平記	信長記同拾遺
三河記	細川兩家記	細川軍記	富樫記
加越關諍記	祇園執行日記	九州治亂記	其他古文書數種
石山靖難記附錄畢			

○正誤十三丁十二行なり。のり衍●十四丁五行輝義顛倒●十六丁四行が勢は加勢の誤●廿一丁七行持揮は指の誤●廿二丁十二行鏡は鐘の誤●二十三丁二行けるなはがの誤●二十五丁九行準備なりはあの誤●三十丁八行細注連署を記せんにはは左の如しの誤●四十四丁十一行石山勢少もは些の誤●五十五丁十行毎年可有馳走には事の誤●五十九丁四行四刑部々は卿の誤なり」

說教法話の好材料 蒐むる處、第一集 中、二百餘章あり **僧侶諸氏** は之を以て徒信を導る

徒諸氏 は之を讀みて彌よ増信せよ

古徳法語集 附近世大家法話 定價金拾五錢 郵税金二錢

目録 古今大徳の訓話は身を修め心を正すの綱規にして一日も座右に缺くべからざるものたり
 解脱上人の愚迷發心集●慈雲尊者の法語●惠心僧都の法語存覺の法語●天桂禪師の法語●無住老人の法語●一遍上人の法語●他阿上人の法語●飲光尊者の法語●東岳堂主人の山濤隨筆●法華師の釋門警誠●僧僕師の昨夢虛談●僧鎔師の閑窓法語●仰哲師の合明閑話●僧純師の家内相續●善讓師の眞宗安心にして附録には萩野獨園●神谷大淵●松風居士濕美契縁●稻垣湛空●犬飼舜等諸師の法語あり
 凡て假名を附したばは誰人にも續み易死者にして出離を求むるの先導師なり佛縁の厚死諸氏への之を愛樂せられんことを望切す

發行所 京都市油小路 北小路上ル **興教書院**

明治廿四年四月廿一日印刷

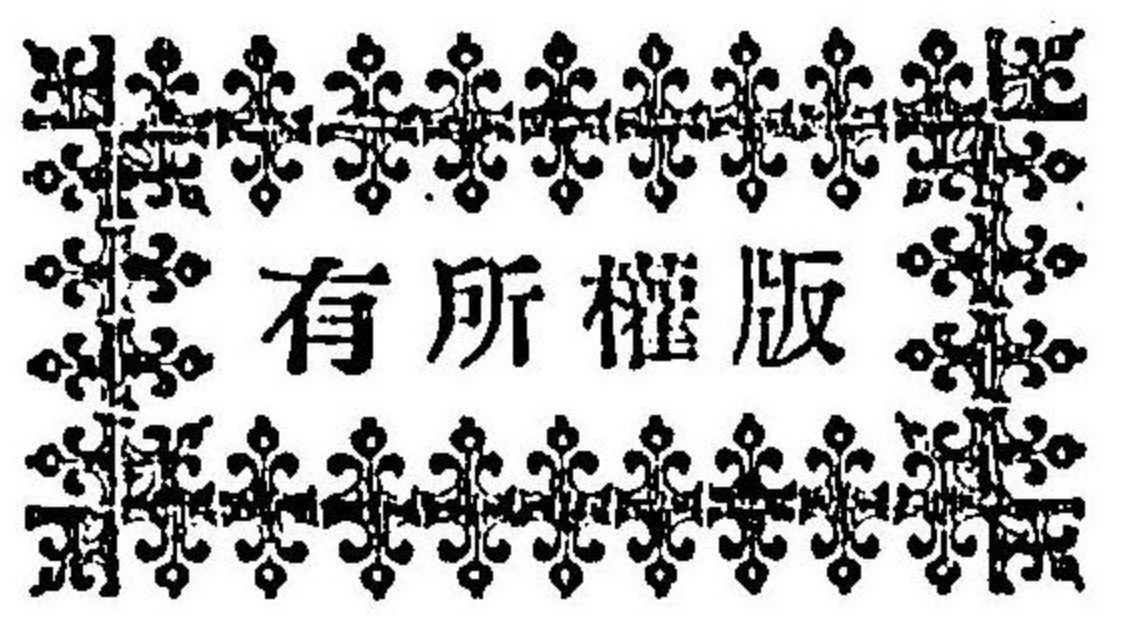
明治廿四年四月廿二日出版

編輯兼發行人 福岡縣平民 神代洞通

島根縣平民

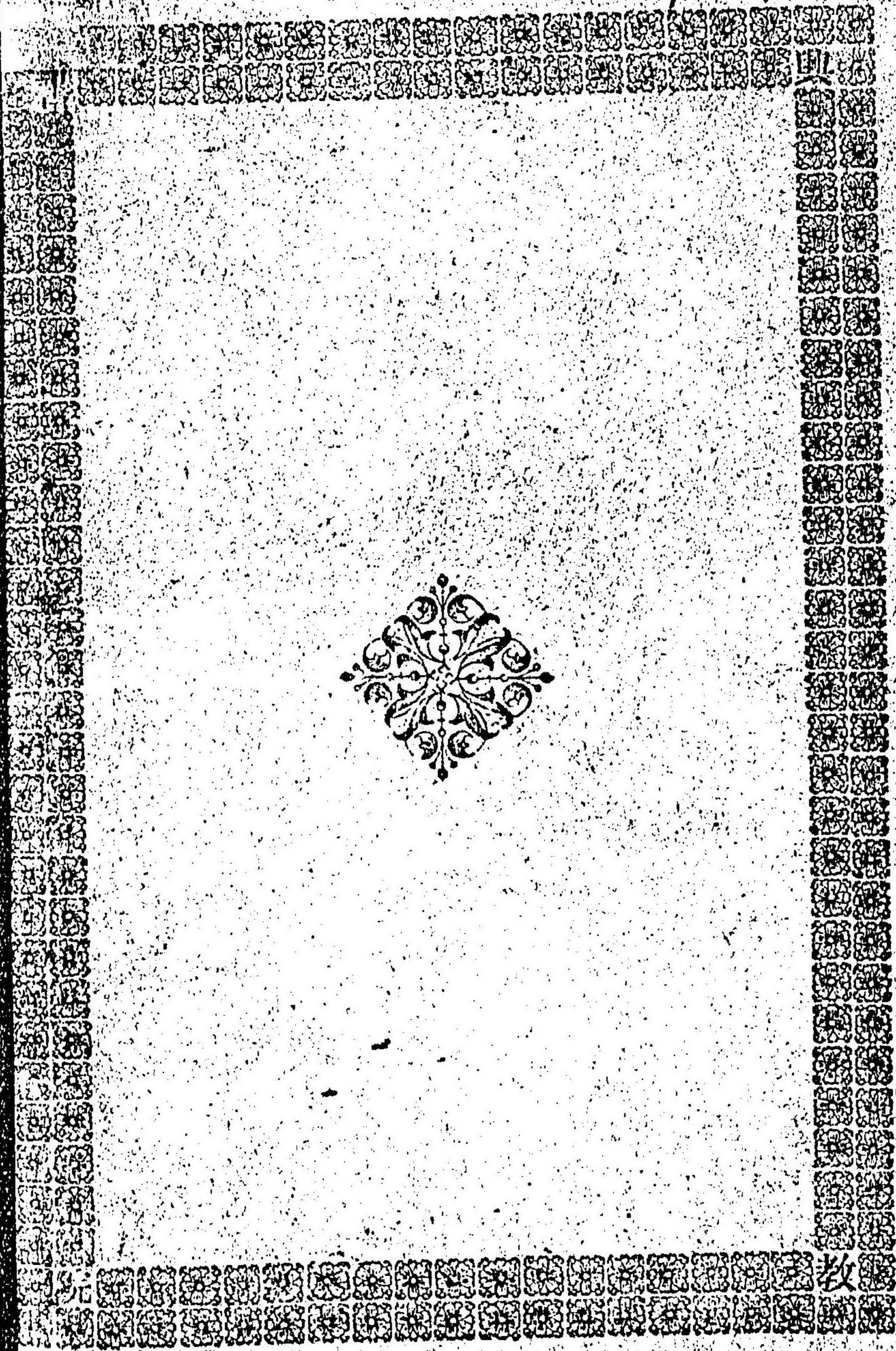
印刷人 太田天畫

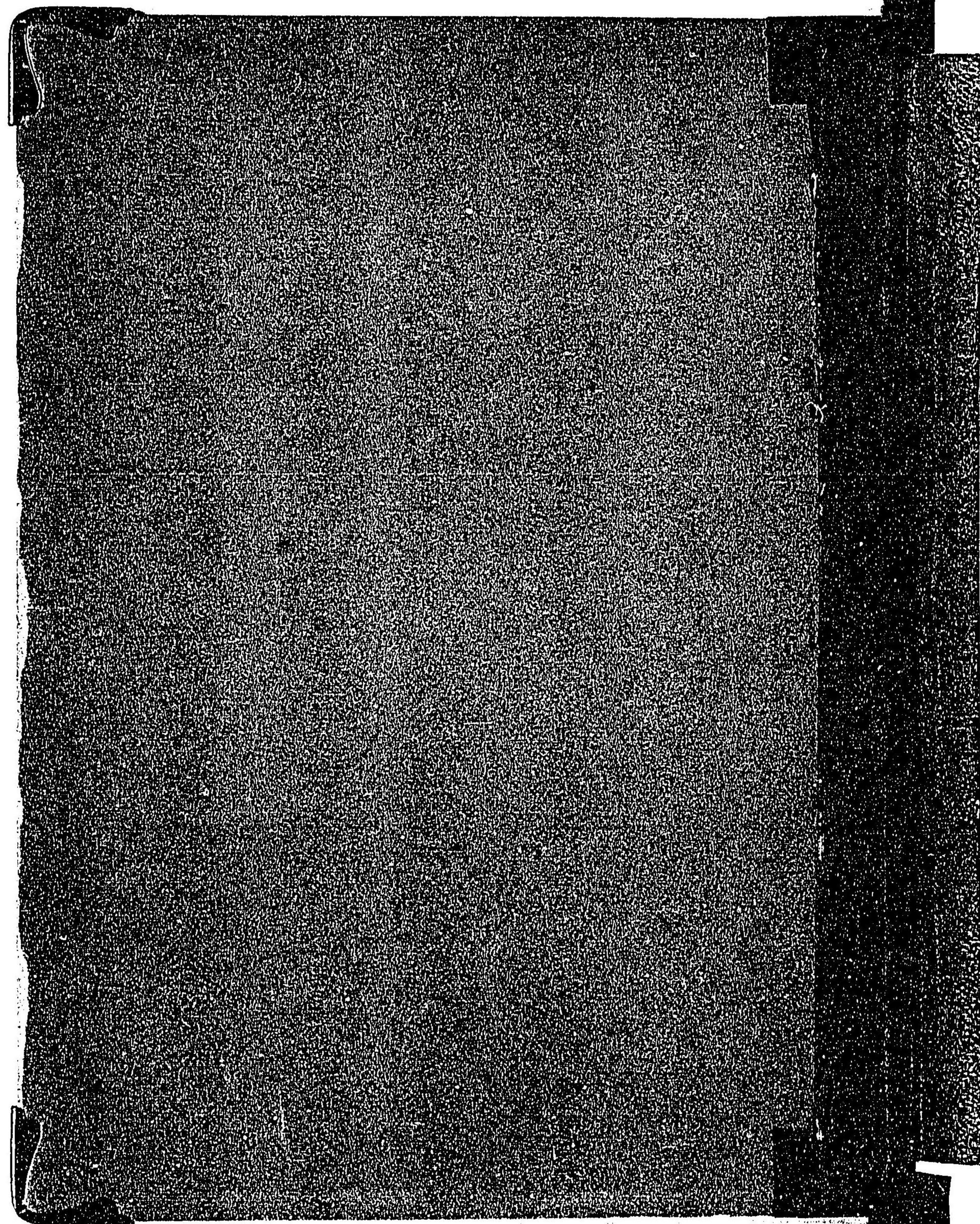
京都市油小路北小路上ル 玉本町第五番戸寄留

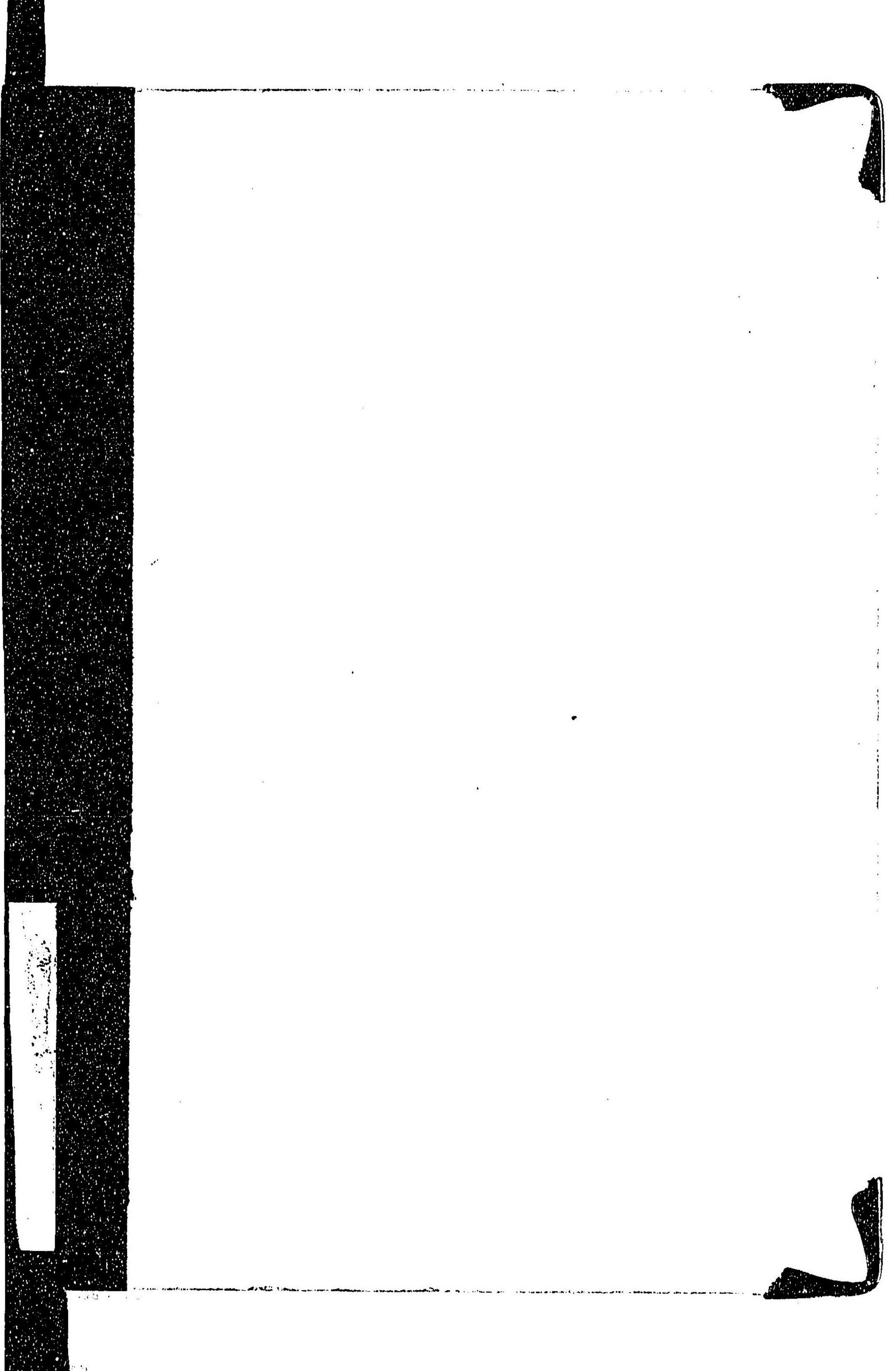


發行所 京都市油小路 北小路上ル **興教書院**

2P-71







188.75

Ko725i

国立国会図書館

017365-000-3

188.75-Ko725i

石山靖難記

神代 洞通/編

M24.4

ABF-0059



